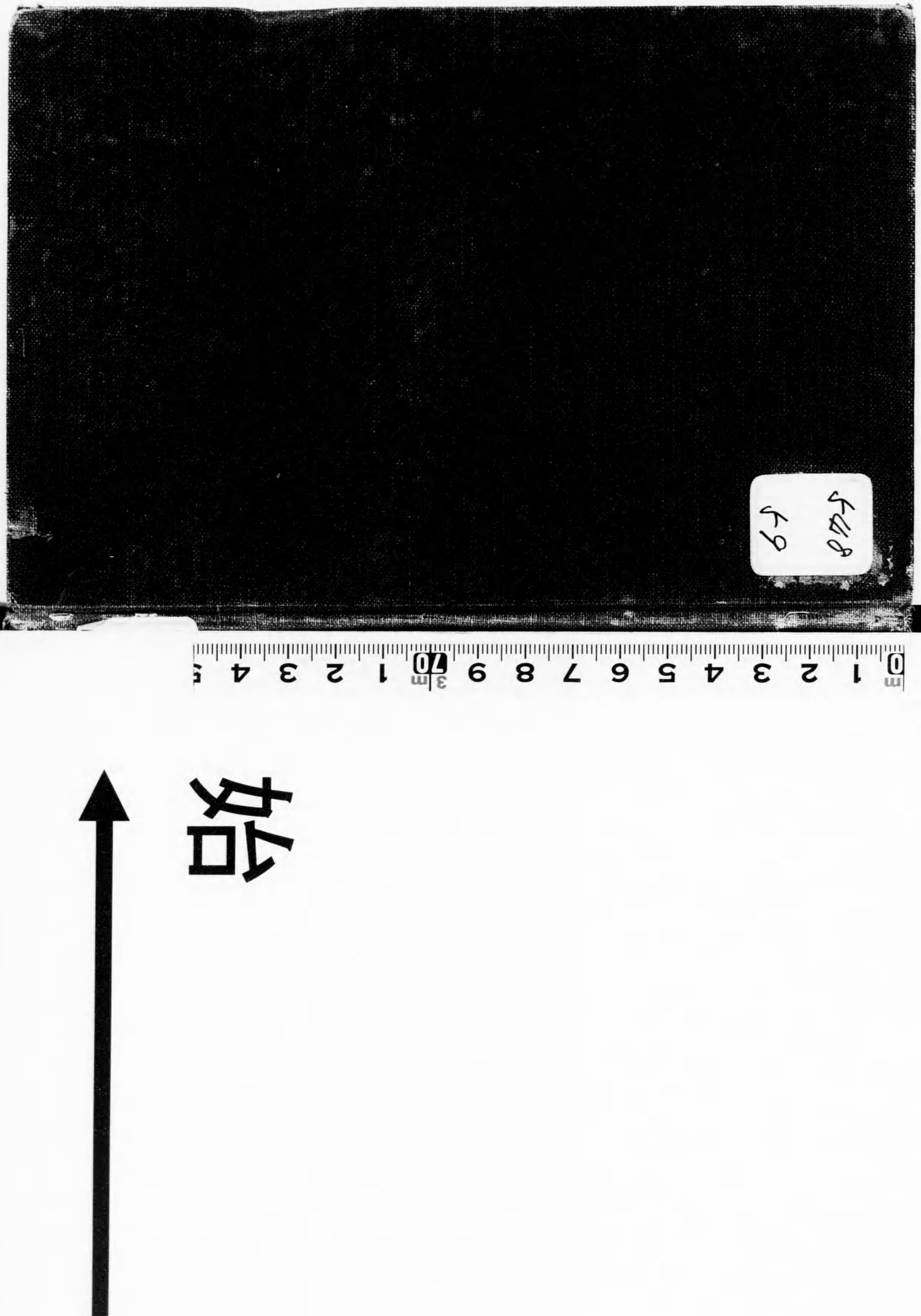

40
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4
9y
8ay

享和句帖

俳諧寺一茶遺稿

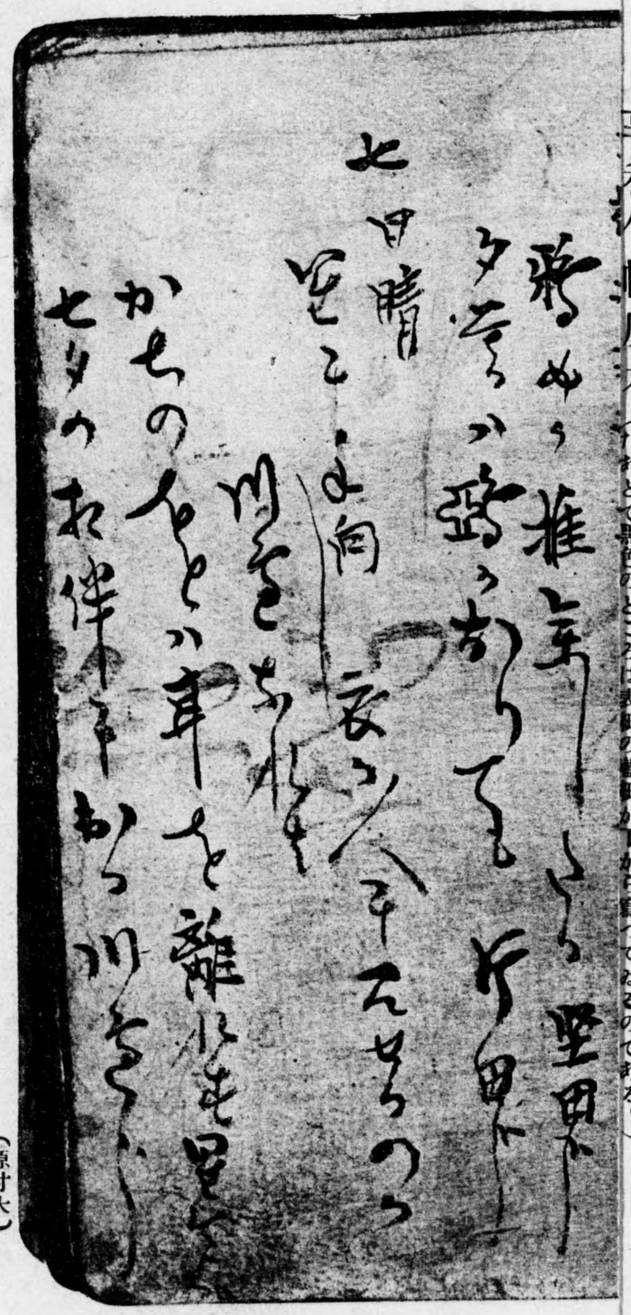
享和三年

信濃教育會編
一茶叢書第一編

東京 古今書院發行

大正
15.6.24
内交

享和句帖原本（享和三年七月の部である。中央は墨壺入れに一茶手づからクリヌイたわとて黒色のところは表紙の藍紙が下から寫つてゐるのである。）



（原寸大）

享和句帖原本（享和三年七月の部である。中央は墨壺入れに一茶手づからクリヌイたあとで黒色のところは表紙の藍紙が下から寫つてゐるのである。）

（原寸大）

548-59

一茶叢書刊行に就いて

俳諧文學の復興は近時特に目覺ましいものがある。俳諧として俳壇の擡頭を見るのみでなく、歌壇にも小說界にも俳諧文學の反映が日に著しいものがある。わけても芭蕉と一茶の研究がこの氣運の二つの中心たるかの觀がある。

芭蕉はその溫雅な人格と幽玄な俳風とによつて永く後人の心に生き、一茶は悲慘な現實の中に孤獨な生涯を送り、如實に生活苦を嘗め盡したその沈痛な響によつて人の肺腑を刺すものがある。しかも彼の涙は時に笑にまぎらされ、時に自嘲諷刺の棘となり、時にはまた深い諦めの底か

ら高い存在者への信頼となる。一茶が現代人の心に甦りつゝあるのは、いふ迄もなくその特色ある個性と、その自由な表現にもよるものであるが、更にその奥に閃くこの人間味（ヒューマニティ）の深さに基くものである。一茶研究の意味は主として此點に存しなくてはならぬ。

近時一茶に關する研究資料の出版は漸く多きを見るに至つたけれど、この種の刊行物ではまだその全幅を盡すことが出來ない上に、猶未だ一般に公表されたことのない作品や手記の、未刊のまゝに遺棄されてゐるものも尠くない。

由來我が國文學研究の資料は、何れの時代の作品についても、その原本が保存されてゐないために、流布本以外に數々の異本が發見されても、夫夫の寫本系統を明かにして原型に達し、信憑するに足るべき定本を得ることは至難な狀態にある。

然るに一茶の作品に關しては、大部分その眞筆本が今尙鄕里を中心とした關係の諸家に藏されてゐるので、この眞筆本によつて確かな定本を刊行して置くことは、單に今日の一茶研究に確實な資料を提供するのみでなく、斯かる事業それ自身が上述の如き狀態の我が國文學研究上に貢献する所以でもあらうと信ずる。

とはいへこれ迄、一茶に關する文献の刊行がこの不備を脫し得べくして脫し得なかつたのは、埋藏されつゝあつた遺稿の分布が意外に廣い範圍に亘つてゐることの外に、一茶の筆蹟が既に「書」として珍重され來つてゐるがために、句稿や手記の類迄も、遺稿としてよりも、寧ろ單なる骨董品として各地に轉賣せられ、益々蒐集上の困難を加へ來つたのも一つの原

因であつた。又一面には、一茶が俳人として尊重されて來たことから、何と俳文類のみが世人の注意を惹き、從つて營利を度外視することの出來ない出版業者の手によつては、只さういふ方面のもののみが刊行され、人としての一茶の生活に觸れ、從つて彼の俳諧の根柢を爲すやうな他の種類の文献には、却つて重要な意義を有し、豐かな趣致を藏するものあるにかゝはらず等閑に附せられ、埋沒したまゝ今日に至つたものも少くない。

本會は是に顧みて、さきにわが信州の生んだ一代の先覺、佐久間象山の全集を編纂刊行した例に倣ひ、一茶遺稿を各方面各種類に亘つて網羅蒐集し、一面には未だ一般に公表されなかつた新資料を公刊し、一面には既刊諸本を一々眞筆本に照合して確實な定本を作り、一茶叢書として刊行することを企劃した次第である。

幸ひ此企は所藏家各位の好意ある贊助を得、今日迄埋藏されてゐた幾多の好資料が發見され、現に夫々の委員によつて調査を遂げ原稿の整理に力めつゝある。

斯くて本叢書は從來の一茶文献に幾多の新資料を加へ、しかもそれら各材料は一々眞筆本に據つて嚴密な校合を加へて刊行される點に於て斯界に貢献する所尠からざるを信ずるものである。

若し夫れ本叢書の刊行が天才一茶の眞生命を如實に生かし、その面目を不朽ならしめる一助ともなり得るならば、本會の微意と努力とは酬いられて餘りありと言ふべきである。

信濃教育會

享和句帖に就て

勝峰晋風

一茶叢書第一編として一茶の享和三年句帖が選定された。第一編必ずしも全叢書の第一文獻といふ意味でないが、本句帖の選定された理由の一つは、多くの研究者の知らざる其の江戸に於ける生活記錄である爲めなる事を先づ擧げて置きたい。

享和三年は、一茶四十一、其の父の終焉を告げて三年の後である。異母弟との不和は父の遺言を守つて鄉里に定住する事を許さなかつた。一茶は孤影煢然として再び江戸に來り市中を流寓して居た。此の享和年中こそ一茶傳中の暗黑時代なのである。不惑にして妻なく家なき一茶の江戸生活は研究對象としての興味多かる可く、事實は資料の無に近き爲め後人をして永く困惑させた問

題である。それ故一茶の傳記作者は頻に焦燥して一茶の句境を模索し、それに據つて得たる印象を暗示的にまことしやかに說いて來た。本句帖はそれらの不安な影を拭ひ去つて一茶傳の一部を瞭然たらしむる記錄である事に於て、一茶叢書第一編として其の價値と理由とを充分備へて居るといへやう。

題名の『享和句帖』は刊行に際し、信濃教育會の委員諸氏が一致可決した結果假に附けたので原本は全く無題筌の日記體句帖である。其の原本は縱六寸、橫四寸五分のこれを頭陀に入れ、これを懷中するに便利な小菊本、今の四六判の體裁をなして居る。原本の右端中央部を長さ一寸八分、橫一寸の細長き形に紙を截ち落してあるのは墨壺を入れ置く爲めの用意である。卽ち此の句帖を開けば中央の柱のところが左右に開いて用意の墨壺があらはれそれを閉れば墨壺は橫にたゝみ込まれる考案なのである。此の穴のくり方は一茶の手先の器用さを思はせるが、えぐられた紙の鋸齒狀を呈して居るので、鋭利ならざる小刀を以て力まかせに截斷したのであらう事を想像させる。用紙は一茶の遺稿類に常に見る如く書き汚された反古紙の裏を返して再び使用したのであるが、その一部は「一茶」とそれから宛名の「樣」を木板で刷つたもので、多分封筒用に刷つて置いたのであらうと思はるゝ其の裏紙を利用して居る。裏表紙の內に「紙數百六枚」と何人かゞ原本の紙數を檢して記入してある。

『享和句帖』詳しくは享和三年四月十一日より同年十二月十一日に至る日附の存する一茶の發句控帖といふ可きであらう。四月十一日以前は後に脫落したのか、それとも十一日以前は最初よりなく同日を起筆とした句帖であるか多少疑問のない事はない。併し四月十一日附分は重複して二枚ある事と、その一枚の裏に署名捺印して居る事から察すれば後者四月十一日起筆と見てよいか

と思ふ。表紙を附けて、其の上から上下二ヶ所に紙撚でつゞり込んで、其の紙撚の結び目も歴然殘つて居るのも内部の紙數に脱落なきが如く思はれる。表紙裏に猶

や汐かとはしり日にいくら　我行

待倦貝や大根引

溺死人金谷に流るゝ

柴にくむや蟬の聲

うれし門の榎哉

右の如く上半は全く捲り取られた一枚が殘つて居る。これは白紙のまゝであつたところへ覺書に書いて置いたのであらう。重複した四月十一日々附の一枚は

享和

十一日晴

題　劔大沼

浮嶋か添ふて來よかし閑古鳥

雨無　巧言如流

時鳥善事も千里走るべし

馬市の日の暮かゝるかれの哉　野竹

四日　晴　百首ニ入夕立風花ふる

五日　晴　祭舟出サス

日　晴　浦□□船中

とあるが文字なき部分は紙ちぎれ、或は手擦の爲め讀み難きところである。今一枚の四月十一日以後は『享和句帖』本文に掲ぐると同一である。

日附の重複せる初丁裏に、一茶の寓居せる宿所附及び文音所が併記してある。

江戸本所五ッ目大嶋

愛宕山別當　一茶園雲外

愛宕山の『愛』は旅日記の宿所附にあるのと同一筆法で、『愛』と讀んで置いたがしげ〳〵見詰めて居ると『愛』ではない。明瞭に『憂』である。併し、一茶の常に所持した『新增行程記大全』安永二年改正本に一茶の自筆で「江戸本所五ッ目ァタゴ住寺、一茶」とあるからは「愛宕山」に違ひない。「憂」は一茶の筆癖でさう見えるのだらう。愛宕山は寺號か、或は修驗所か別當とはその寺なり修驗所を預つて居るといふ事を意味するのか。それとも其の陋居をかくも大仰に戲稱したのであるが。疑問は幾樣にも抱き得られるが旅日記といひ本句帖といひ單純なる洒落書きとは推定されない。無住寺又は修驗所の事實別當であつたかも知れないのである。『一茶園雲外』の署名は新發見である。一茶園の號は『急遽記』の表紙にも認めてあるので一茶の俳諧寺を稱せざる以前の庵號であらうが、雲外の別號は本句帖より外に全く所見ない。二六庵菊明と呼ぶ別號の一茶にあらずして別人なるは明確な考證材料の存するものあるので抹殺してよいと共に、雲外の號は事小なるに似て研究者の大に考慮を要する點であらう。一茶園雲外の左傍に「月船」といふ印が捺してある。月船は下總の俳人である。一茶とは非常に親密の間柄で遺稿中に其の名を散見するが、後年の一茶は落欵に一茶の印を使用しながら、本句帖のみに月船の印を捺してあるのは推測に苦しむところである。一茶の俳友である畫人巢兆は亡父松圃の印をその畫の落欵として居るので名高いが、一茶もそれに倣つて一時此の「月船」の印を以て代用させた事がないとは限らぬ。孰れにしても好奇心を唆られずに居れない問題である。

一茶は共の師二六庵竹阿が『續五色墨』の一人であつたから、江戸座の俳諧に對して、寛政以後平明調を本位として來たが、享和になると彼の個性の作品に反映する度合ひが著しく強くなつた。本句帖から抄出すれば

手招きは人の父也秋の暮

一ッなくは親なし鳥よ秋の暮

鳥さへ親をやしなふ秋の暮

の如く享和元年の日記に「父ありてあけぼの見たし青田原」とある微溫的な、眞實に徹しない句境に對して、遙に深刻な心の叫びをあげて居る個性味を感じないで居れぬ。たゞ注意を要するのは

明ほのゝ春早々に借着哉

梅さけど鶯なけどひとり哉

の句中に一茶の境涯が卒直に詠じられて居る如く思はれるが、前者は九月朔日、後者は八月廿六日の日附の下に記されてゐるので、此の句を以てたゞちに一茶の生活の直接表現であるかの如くは論じ難いのである。さはいへ後年の一茶調そのまゝの

五月雨や二階住居の草の花

夏山の背ぎつたる月よ哉

夕暮やひざをいだけば又一葉

案山子にもうしろ向れし栖哉

の如き絶唱も亦句帖の中に發見されるのである。その間後年の一茶の作とは技巧に多少の逕庭あるは止むを得ない。たとへば本句帖の

五月雨や牛に引れて善光寺

は俗諺を引用したに過ぎないが、

陽炎や手に下駄はいて善光寺

は陽炎のほか〳〵する季感に配するに蹇の善光寺詣を以てしたので前者は享和時代、後者は文政時代に於ける一茶の句作態度を見る一例として擧げて置く。

本句帖の中には文政十二年板の『一茶發句集』にある

今少したしなくも哉菫草

の如き作をたま〳〵見掛けるが、十中八九はいまだ曾て世聞に發表されないものである。

一茶の日記體句帖は日附の下に必らず其の日の晴曇を書いてあるが、本句帖にも克明にその日附と晴曇を附けて居る。文通及び來往を備忘的に晴曇と共に掲げたものに、一茶の消息を窺知し得る斷片的材料が散在してゐる。それを見ると享和三年は下總邊を時々行脚した以外江戸市中を放浪して居た。本所五ッ目の愛宕山別當は名のみで、それらしい用向きを記したところがない。四月廿日に「詩經講譯出席」とあり、七月六日に「出席」とあるので詩經の講義に列した事を知り得るが、「家」の字に「タン」と「セン」の兩音あるを左右に振り「イノコ」「ハシル」「キル」「ヨロコブ」の國訓を註記してある例なども乏しくない。詩經の講義で聞き覺えたのでもあらうか。俊乘坊や重衡の逸事は讀書中に感ずるまゝを抄錄して置いたのであらう。易の卦及びその斷章の句帖中に散見するのは當時易を學んで居たからで、『旅日記』になると他人の緣談を判斷するまで本式に易に通じて居る。又、八月廿五日は支那語の騰寫に一日つぶして漢文にこまかく振り假名を施してゐる。正確な淸朝音を知らうとするより支那風の結婚殊にその挨拶の言葉に好奇心を向けたのであらう。今日なら新聞の三面種となる市井の雜事に一茶は常に關心して日記類に書いて居るが、本句帖にはさうした記事は乏しく、谷中延命寺の納所が一寡婦と通じて晒しものになつた手抄位のもので

ある。本句帖の和歌は大概古い歌集から抄出したので一茶の作歌と思はるゝものは尠い。俳句中にも作者名を記したもの以外に一見自作の如くで、七部集等から抄錄したものがある。其の出典の判然せる分は頭註に辯じて置いたが、たしかにそれと知り得ずして他人の作の渦入せるものも猶多少は潛在するであらう。

本句帖の原本は故俳諧寺可秋氏の藏するところで、信濃敎育會の一茶資料蒐集委員馬嶋俊二氏が可秋氏の後なる丸山家から借覽し、原本の體裁通り筆寫されたものと、私が別に筆寫して置いた原稿とによつて印刷に附し、校合には原本を再び借用して嚴密に對照したのである。丸山家が本句帖の刊行を快諾して永く借覽を許された其の好意に對して厚く感謝の意を表したい。

一茶叢書
第一編

享和句帖

享和三年

原本京屋庄七
方ノ次ニ左ノ
記事アリ
七日晴　浦賀
口
八日晴　横ス
カ又左衛門口
口村一向宗也
新町石岡治

江戸本所五ッ目大島
愛宕山別當　一茶園雲外
月　舩
文音所　大門通和泉町
京屋庄七方

享和三年　四　月

十一日 晴天

けつくして松の日まけや芥子花

、咲く日より雨に逢けりけしの花

夕陰や片がは町の薄羽織

陽炎のおびたゞしさやけしの花

業平も死前ちかししぶ團扇

艸の蛩はら〳〵もどる火かげ哉

痩蛩の矢指が浦の曇り哉

萍の花より低き通りかな

雨灰汁に月のちら〳〵茂り哉

飴ン棒横に加へて初袷

木母寺が見ゆる〳〵と日傘哉

十二日 雨

青山を始て見たる日傘哉

山おろし泊瀬の木間を日傘

せゝなきの樋の口迄蓮の花

二日ぶり夜は明にけり蓮の花

蓮の香をうしろにしたり岡の家

けふも〳〵茶をたをされつ蓮の花

十三日 雨　北風吹

享和句帖

涼しさは黒節だけの小川哉　士朗

あさ陰に關も越えたる扇哉

萍やいつやどり木の薄紅葉

羽州大沼を題して

浮島について來よかし閑古鳥　其角

夏艸や橋臺見へて川通り

更衣申合せて淋しけれ　ナニハ茶裡

灌佛や蝶も搦ん御そぶり、　無衰

、梅の葉のけしきに巡る清水哉　成美

萍や黒い小蝶のひら〳〵と

竹といへる裡僧の久しく布川邊をさまよふ

追れ〳〵蚊の湧く艸を寢所哉

夏艸や―本文此ノ句墨消シ

裡僧―本文ノマヽ

ひよろ〳〵と萩に立添ふ鹿子哉　士朗

こまかたに舟かよせて

此碑では江を哀まぬ螢哉　其角

十四日 四ッ時 晴天

、空腹に雷ひゞく夏野哉

白蓮に二筋三すじ柳哉

洛陽の入口らしきのぼり哉

朝雨の目出度かゝるのぼり哉

穢太町に見おとされたる幟哉

うら店や青葉一鉢帋のぼり

も一日葉陰に見たき茄子哉

享和句帖

目守長目詠也（マモル ナガメ）

うら店や―字體明瞭ナラズ

入し一本交入るヲ消シテ改ム

一茶叢書

苗賣の通る跡より初なすび

痩松も奢がましや夏の月

木末から土用に入し月よ哉

十五日 曇 卯ノ三刻大地震

、雲の峐の下から出たる小舟哉

十六日 晴

我孫子より北へ入、野田を過て流山に入ル道に、

一丈ばかりなる蛇蟠る

大蛇の二日目につく茂り哉

朝地震ヨリ一本交ノマヽ

十七日 晴

麥刈の不二見所の榎哉

山水の溝にあまるや田麥刈

麥刈の用捨もなしやことし竹

麥の穗や私方は竹の出來

十八日 晴 芒種五月節子ノ一刻ニ入 馬橋に入 入梅に入

朝地震と成けり蝸牛

あかなくにまだきも月の隱るゝは

山のはにけて入れずもあらなん

十九日 雨 晝より晴

享和句帖

しの竹のひよろ〳〵暮る穂麥哉
麥ぬかの流の末の小なべ哉
往來の人にすれたる鹿子哉

かなへ―小鍋

廿　日　晴　江戸に入
氣の儘に脇ざしさして春月（はるのつき）　茶國
詩經講譯出席

廿一日　朝雨　四ツより晴
廿二日　曇天
八百とせの齡たもてりし翁もつひに妻の丸百やは
あらぬとなけき

廿三日　曇　夕雨
廿四日　晴
與介坊が祝往生
一二本置みやげかよ初なすび

廿五日　雨
改て又ふむ山やほとゝぎす
時鳥聞ての後の外山哉
聞初ていく日ふる也時鳥
時鳥はおろか卯花さへも持たぬ也

廿六日　雨
享和句帖

柳没　三月廿八日

○ルウダ蠻語也

著波三禮艸（ウヒ）

二柳ハ大阪の俳人不二庵ト號ス

廿七日　雨

廿八日　晴

福山李朝文通

廿九日　晴

五月

一日　雨

一日ハ晴天ヲ消シテ雨トス

二日　曇

五月雨

○一日にはや降あがる五月雨

五月雨の竹に隱るゝ在所哉

かい曲り柱によるや五月雨

十軒は皆はしか也五月雨

二階から見る木末迄五月雨

○五月雨や二階住居の艸の花

夏の月中洲ありしも此比や

三日　雨

あれ程の中洲跡なし夏の月

夏の月二階住居は二階にて

乞食せば都の外よ夏の月

享和句帖

四日―書過トシテ書ヲ消ス

一茶叢書

四　日　曇　晝より晴

散迄に月日も見ぬや百合の花

やけ石のこけ重りて艸の花

山松に吹つけられし百合花

松迄は日もとゞきけり百合花

ゐりはりと茨の下より百合花

いくばくの艸ほこりや百合の花

長降りの節の明らん百合花

我見ても久しき蟾や百合花

うつとしや雨はやみても百合の花

祭仲日都城過ニ百雉一國害也

五　日　晴天　寅六刻ニ入

夏至五月中寅六刻ニ入

六　日　晴

七　日　雨

八　日　曇

アヤツリニ行

九　日　晴　夜雨

十　日　雨　虎門金比羅參

十一日　雨

十二日　晴

十三日　晴

十四日　晴

享和句帖

一茶叢書

丶時鳥逃る山のは追つめよ

よき袷はしか前とは見ゆる也

十五日 晴

十六日 晴

十七日 晴

十八日 夜雨

丶蚊一ッの一日さはぐ枕哉

淺艸地内關城寺

釋道圓也 墓ハ右脇也

關城寺ハ閼城寺トモ見ユ

十九日 雨

廿日 雨

廿一日 雨

廿二日 雨

廿三日 晴 舟ニ乘(ノリ)木更津ニ入 夜小雨

廿四日 雨

扇丶海の月扇かぶつて寢たりけり

扇から日は暮そむる木陰哉

丶扇迄雨吹かける木陰哉

蠅一つ打ては山を見たりけり

夏山や一足づゝに海見ゆる

廿五日 曇

享和句帖

ほつ〳〵と二階仕事や五月雨

暮れぬ間に飯も過して夏山（なつのやま）

逸して一字餘明朝ナラズ

廿六日 曇

廿六日一本文五廿六日トアリ

廿七日 晴

廿八日 晴 夕立

しばらくは枕の上や雲の峰

雲の峰いさゝか松が退くか

いさゝかーいさりかトモ見ユ

川縁はや月夜也雲の峰

川縁は一本文はチ脱ス

家一つ蔦と成りけり五月雨

家ありて又家ありて夏木立

掃初ていく代になりぬ青松葉

廿九日 晴

卅日 曇

竹の子に皆もかゝらず今朝の雨　松木阿彦

夏の雨竹より雲の起りけり　越中吳山

竹うゑて又植にけり苔の花　士朗

鶯の屋根から下る畠哉　巣兆

鶯のもどる時分ぞ汁焚ん　北鳳

三ヶ月集

春雨の夜もきけん（機おるん）の河内哉　双鳥

梟は春をおしむかおしまぬか　鳥春唄

永き日の汐やどこ迄角田川　ツカル玉之

機おるーきけん／傍ニ畫添フ

享和句帖

たま〳〵に晴れば闇よ夏の山　一茶

噂すれば鳴の立けり夕涼み　仝

なりどしの隣の梨や夏の月　〃

夏の月と申も一夜二夜哉　〃

六月

一日晴

青梅に蟻の思ひも通じけん

俊乗房重源醍醐門従東大寺焼失後被レ補二大勧進一造営二大佛殿一俊吾名號二南無阿彌陀佛一是阿彌號始也

建久六年六月六日合掌逝

夕暮を待人いくら藤の花

おつぬーおいぬトモ見ユ

風も吹月もさしけり蛩の宿

探る梅朶の蛙のおしげ也

てつぺんの梅の未練におつぬ哉

二日曇　土用入

行灯を持てかたつく涼み哉

三日晴　富津ニ入

四日晴

むら雨のかゝれとてしも青簾

〃門〳〵も雨ははれけり青すだれ

夕顔や柳は月に成にけり

享和句帖

燈燭―紙燭

〻蚊を殺す壁蝎にうつる白髪哉

五日 晴

六日 晴 富津より佐貫通り金谷に入

簾して涼しや宿のはいり口 アラノ荷兮

夕暮天王詣 樗木アリ

七日 晴 元名ニ入

夕立やばせをかぶさる戸なし窓 夜來

七日―不交重出

八日 晴 金谷入

膝―字體明瞭ナラズ臨トモ見ユ

九日 晴

寐心や膝の上なる土用雲

十日

開帳參

〻活鯵や江戸潮近き畫の月

十一日 晴

十二日 晴

十三日 晴 隨齊ニ入

十四日 晴

十五日 晴 夕立 扇波死

享和句帖

一茶叢書

一つ蚊屋の月も名殘りや十五日

十六日 曇 夕立

十七日 晴 夕立

十八日 晴

十九日 晴

廿 日 晴

行て來て朝貞見るやゆるくと

深谷政之介樣御内　荒木澤右衞門よし周

江戸ものに成すましけり鰹賣　同

廿一日 晴

廿二日 晴 シバイ

廿三日 晴

廿四日 夕立 雷堀留二丁目におつる

廿五日 夕立

廿六日 曇 雨

、打水や挑灯しらむ朝參り

廿七日 雨

難有鑑基不如待時

廿八日 雨

享和句帖

焼山の山やけ

露けさや石の下より艸の花

脅レ肩諂笑痴二夏畦一

打水や這つくばひし天窓迄

日〳〵に四五本ちるや合歡の花

失人豈不仁兩人

虫除の札のひよろ〳〵かれの哉

鳥ども〻御祓にあへり角田川

七月

一日 雨

一葉 朝貞 天川 露 灯籠

合歡ー本文合歡ニ誤ル

人去て行灯きえて桐一葉

白露のおき所也梧一葉

あらかんと二人寐て見る一葉哉

○月影のさゝぬ方より一葉哉

活過し脛を打けば一葉哉

痩臑を抱合せけり桐一葉

起〳〵に片ひざ抱ば一葉哉

朝顔やしたゝかぬれし通り雨

○夕暮やひざをいだけば又一葉

朝顔や大吹降もあがり口

朝貞や花見るうちもいく度立

朝貞に老づら居て團哉

享和句帖

一茶叢書

朝貞の大所の濃かりけり

二日曇

天川都のうつけ泣やらん

うつくしき團持けり未亡人

夕暮は鳥が下りてもかたゝ哉（ケイ 聲 キヤウ）

待もせぬ鳥がおりしかたゝ哉（待 劈）

殺されにことしも來たよ小田の鳩

鳥をとる鳥も枯野丶けぶり哉

萩ちりぬ祭も過ぬ立佛

痩はぎに雫見せけり萩花

雲形に寐て見たりけり天川

汁なべもながめられけり天川

破なべも夜はおもしろ天川

我星はどこに旅寐や天の川

活過し脛をたゝくや艸の露

露けしや艸一本も秋の體

同じ年の貞の皺見ゆる灯籠哉

灯籠やきのふの瓦けふ雀

片貞の雨だれ嬉し盆灯籠

盆灯籠三ヶ二ヶ見て止めにけり

かはがりの煙もとゞけ星今よひ

七夕や大和は男三分一

星迎大淀かつらどこよけん

享和句帖

寐聳てふんぞりかへつて星迎

三日 晴 嵐

四日 晴

憲法（ケン） 匡程 鎧

五日 晴

深さうな所もありけり天の河

六日 晴 出席

七夕や流の方を枕して

魚網之設鴻則離之燕婉之求得此戚施

鴉めが推參したる堅田哉

夕暮は鵐がおりても片田哉

七日 晴

星に手向し衣か人に見せるのか

川邊なれば

かぢのをとは耳を離れず星今よい

七夕の相伴に出る川邊哉

七夕や親ありけなる人の舟

八日 晴

九日 晴

享和句帖

十　日　晴

十一日　曇

昔〳〵妻こもりしよ艸の花
艸花をかこつけにして里居哉

十二日　晴　南風

べそ〳〵と花火過けり角田河
大花火角田河原はあの當り

（へそ〳〵ヒニー本文ヒナ脱ス）

十三日　晴　南風　花火

十四日　晴

一本の鶏頭ぶつゝり折にけり

來る〳〵も待人でなし夕紅葉

十五日　曇

萩もちり祭りも過ぬ立ち佛

十六日　曇

十七日　晴

十八日　晴

うつくしき團持けり未亡人
殺されに南へ行かり天つ雁
鳥をとる鳥も枯のゝけぶり哉

十九日 晴

夫なしにけふなれしよ日傘
朝寒にとんしやくもなき稲葉哉

夫なしに―本文ノマヽ

廿日 晴 出會

廿一日 晴

廿二日 晴

廿三日 晴

說 桎梏 ○朱祓方ニ來

廿一日 晴

大名の笠にもかゝる夜露哉
朝露の袖からけぶり初めけり

けぶり也

大根の二葉うれし秋の風
日の暮や人の負より秋の風
大根の二葉にしれや秋の風
うしろに
夕月のけば〳〵しさを秋の風
一人づゝ皆去にけり秋の風
秋風二夜過しつゝ□

廿二日 晴

廿三日 晴

廿四日 雨 八幡

享和句帖

一茶叢書

廿五日 雨

廿六日 曇

廿七日 曇

長崎ー大阪の俳人幾度往ト號ス

象（マンイノコ）象（ハシル）（センキル）（ヨロコフ）　鴻江　鳥の啼

春めくや京も雀の鳴邊り

廿八日 晴

一、書一通　六月廿七日出　長齋とじく

朝貞やけさも雀に起されて

一、又一通　二月十三日　おなじく

丘の梅けさ見し枝もなかりけり

八千坊ー大阪の俳人

梅がゝや北野（すりもの）は（ん）月も春がよき

蛤の鳥にとらるゝ長閑さよ

五月三日出八千坊

町くだり誰が心も青簾

妻に棹さゝせて或夜鵜がひ舟

夜涼みのやくそく。ありし門の月

善藏讃不爲虐

一尺の竹に毎晩涼み哉

ほうきりを後になして小夜砧

晝中の須磨の秋也遠砧

更（さら）しなや闇き方には小夜砧

更しなの蕎麥の主や小夜砧

享和句帖

一茶叢書

洪水は去年のけふ也小夜砧

廿九日 晴

洲崎詣

漸寒き後に遠しつくば山

妙壽子 六月十一日 道二没 張畵 セン

卅日 晝より雨

八月

一日 大南風

二日 晴

三日 曇

谷中延命院納所六十六柳全女抱新吉原五十軒道清太郎母

りせと密通に依て晒るゝ

四日 曇 舟に乘 深堀山に入

連 ノカル ホ

五日 雨

濕緒 アクシヤ ニツチ ウルチヽ アカツチ アタヽカ 剝 ハク 菜

關の灯のとれかねる也朝寒み

喰捨の瓜のわか葉や秋の雨

享和句帖

四の一本文の子脫ス

六日 雨

七日 晴 布川に入

八日 晴

搔レ首 踟躕ス

よりかゝる度に冷つく柱哉

誰謂河廣

川西の古郷も見へて朝寒み

あじろ木にま一度かゝれ深山霧

わらすぐる人やゝ夕霧吹かゝる

どちからの霧もものがさぬ榎哉

驅カクル 險ケハシ キヨハスル 丈人ハ長老ノ稱 ヘタツ

痩萩や松の陰から咲そむる

九日 晴

有レ狐綏々タリ

秋の夜の獨身長屋むつまじき

伯兮 甘心首疾

竹植て竹うつとしきゆふべ哉

揚之水

さし汐や茄子の馬の流れよる

三四本流れ寄たるとし木哉

流れ木のあちこちとしてとし暮ぬ

九日 晴 金比羅角抵アリ

十日 晴 角力

夕時雨一木戈
夕時時二誤ル

けふきりの入日さしけり勝角力

正面は親の負也まけ角力

水上も秋になしたり葛蠶

古郷に高い杉ありはつしぐれ

夕時雨馬も古郷へ向て嘶(なき)

露しもや丘の雀もちゝとよぶ

右葛蠶

免爰

善人の葬の首途を雲吹哉　麥士

行過て茨の中よゆふ涼み

有狐

松陰におどらぬ人の白さ哉

見る程の木さへ山さへ夜寒哉

梅一枝とる人を待(まち)ゆふべ哉

十一日 晴

十二日 晴

將仲子

手をかけて人の負見て梅の花

群龍無首

二番のくむつくり見ゆるたばこ哉

享和句帖

十三日　雨

平安はうしろになりぬ秋の雨
馬の子の故郷はなるゝ秋の雨
田の鴈の古郷いかに秋の雨
一群は今來た貞や小田鴈
秋の雨つい夜に入し榎哉
秋雨やともしびうつる膝頭
膝節に灯のちらめくや秋雨
名月は翌と成けり夜の雨
片袖の風冷つくや秋の雨
投られし土俵見ゆるゆふべ哉
野あらしの縛られし木や秋雨

投られし一本　文ノマヽ

人よび鳥

雨の萩風の眞秋とゆふべ哉
亂れ萩門の荼におとらじと

十四日　雨

逆大路

梅椿人の住家と今はなりぬ

有女同車

朝貞や女車の毛唐人
近よれば祟る榎ぞゆふ涼み
我植し松も老けり秋の暮
松茸にむされて立か山兎

享和句帖

一茶叢書

川音や鳴子の音や明近き

十五日 雨風

十五夜や無疵の月はいつのまゝ

案山子にもうしろ向かれし栖哉

釋 兮

二葉三葉根ばりつよさよ冬木立

冬木立ー冬の字體明瞭ナラズ

十六日 イナサ吹

十七日 夜月清光

東 門

前住し門も見へけり冬日向

十七日ー本文十六日ニ誤ル

風 雨

夜時雨の良を見せけり親の門

さらしなを放れし其夜月夜哉

さらしなはきのふとなりて月夜哉

うしろになせ

見丶

うしろになせー本文ノマヽ、さらしなゆうしろになせは月夜哉ト再案ノ覺エ書ナラン、見丶トアルハ見れはヒ三案セントシタルナルベシ

揚之水

空留主も御尤也麥田植

十八日 晴

湊 泊

翌の分に一山殘す櫻哉

享和句帖

一茶叢書

わか菜摘袂の下や角田川

人員も二度目はかけつ磯菜つみ　成美

十九日　朝霧

還

馬上から默禮するや薄霞

著

かりそめの娶入月よや啼蛙

廿日　晴

さかさまにきしや衣のとしもへぬ

つかふる道にいそぐならひは

麻藝て直な人待や夕涼み

あひがたき人に生れてなよ竹の

直ぐなる心しいらるゝ哉

甫田

きのふ入し田とは見へざる莠哉

廿一日　晴

盧命

狩小屋の夜明也けり犬の鈴

敵筍

洪水をとともせぬや艸の花

朝貟のこく咲にけりよ所の家

享和句帖

死しなの縄目やいかに薄袷（あらな）

廿二日 晴

葛　屨

道よけて人を待也花卯の木

近道はきらひな人や枯野原

常體の笠は似合ぬ袷哉

廿三日 晴

陟　岵

秋の風親なきに我を吹そぶり

十　畝

春の風艸深くても古郷也

伐　檀

見る俵一つ殘してとしの暮

只一つ見る俵かよ秋の家

売俵たゝいて見たる夜寒哉

けふも死に近き入りて艸の花

鼠ない里と見へけり冬構

碩　鼠

清俗記聞

主人上茶（シャンヂア）又献茶（ヘンヂア）トイヘバ客不勞賜茶（ポラウスウヂア）とアイサツス、茶ヲ持出ル

廿四日 晴

山有樞

享和句帖

死跡の松をも植てゆふ涼み
松苗ややがて他人のゆふ涼ミ

揚之水

白石のしろき心の月見哉

廿五日 晴

椒聊

大空もせましと梅の立枝哉　若翁
山椒をつかみ込んだる小なべ哉

主翁在麽

留主ナレバ僕　有事出外不在家裡
用事ありて外にお留主也

在家ナレバ　請坐　某先生

尋問スル時主人留主ナレバ僕　東人不在有什麽貴幹說把我
なにとぞ用事あらば申おかるべし

僕ニ申おかれぬ事は客　令郎在麽某伯某叔在麽
御子息　御兄弟衆

一娘　二娘　一姐　二娘　女十四五歳迄名ヅケズ、嫁シテ後先ノ姓を呼ぶ、王子ナラバ王娘張氏ナレバ張娘

且請坐
いざさし給へ

壻ニ主人自ラ茶を汲んで
今晩多勞且請拜茶
こんばんは御くろう先茶なまいれ

媒人取て聟ニ茶を渡、手ニ居て
得罪多謝　とアイサツス

相伴人、媒人ニむかひ
今晩勞駕種勞或請阿
こんばんごくろういろ〳〵おせわといへば媒人立て
請阿恭喜々々といふ。

三度目書簡出ス、媒人より
多蒙盛没深感厚意且請或席
いろ〳〵御ちさうになりかたじけなし、もはや
おとりくだされ

宣郷迎
宣能嚴
宣通嶷
口ゞゲチチャル
ツクロ　国規闕
乳

傳類天目天一靈知上靈
茶椀天目
茶椀ハ可
茶椀ハ不可

壻主人ニ向ヒ多謝丈人錯憂、
丈人のこちやうあひかたじけなし

坐中ニ向ひ　各位先生少倍
いづれも様がたおとき申さず、といふて立出るも皆おくらんといへは又壻

不敢〳〵〳〵請留歩
ひらに〳〵におくり給ふな

媒人見ゆれば主人勞駕といへば
ごくらう

媒　人　豈敢と答ふ
ナニがさて

新娘
請寛
ごゆりしなされ

不敢々々
どういたして〳〵

享和句帖　綢繆

廿六日 暗

娶貰ふ時分となるや梅の花　雪解て嬉しさう也星の良

秋杜

小鳥にアナドラレタリ小田の鴈
我はあの嶋の木性やかんこ鳥
夕櫻家ある人はとくかへる
手招きは人の父也秋の暮
一つなくは親なし鳥よ秋の暮

羔裘

かつしかに知人いくら梅の花

廿七日 朝曇　晝より雨

鵠羽

烏さへおやをやしなふ秋の暮　曉臺
雪の人親ややしなふ子やそだつ
花木槿人はさす事の殘りけり　蘭更

有林

落葉して日向に立たる榎哉
おれぬ木の下陰や玉霰
たのみなき大木の下や秋の暮
秋の暮大木の下も人たゆる

苟生

梅さけど鶯なけどひとり哉

享和句帖

おれぬ木の―
未文ノマヽ

此遊ノトコロ
筆ノ師先ヲ拭
ヘル處多シ

戀死は―本文作者ハ猿蓑集ノ裏州也

戀死ば我塚になけ時鳥　遊女

蔦紅葉も一つ家をほしげ也

家一つ蔦と成けり五月雨

今時の人とは見へず窓の蔦

長松が―炭俵ノ撰者野坡の句

廿八日 雨

松の蔦紅葉してから伐られけり　采苓

又來たと烏思ふや小田ノ鴈　支老

麻一本つんと延たる茨哉　車隣

長松が親の名で來る御慶哉

等ぬる―本文等ぬ牛トアリるチ脱ス

臣下―本文ノマヽ、臣ロトモ見ユ

としよりの追從わらひや花の陰　蕉葭

行〳〵し尋ぬる牛は吼へもせず

又けふも逢ひそこなひぬ花の山

廿九日 雨 晝より晴

卅日 晴

終南

花の雲あれが大和の臣下哉

腹の中に櫻の花や咲ぬらん

夜ごと〳〵の夢にし見ゆる

黄鳥

享和句帖

むざんやな兜の下のきりぐす　翁

立枯の残り多さよ花の中　古人

むざんやな―奥の細道ニアル芭蕉ノ句

晨風

活過し門の夜寒や竹の月

後拾遺　露ばかり逢そめし人のもとへつかはしける

白露も夢も此世も幻も

たとへていはゞ久しかりけり

山雷願

一人前菜も青けりけさの霜

九月

朔日晴

無衣

明ほのゝ春早々に借着哉

渭陽

脇息にあの花折れと山路哉　其角

權輿

冬籠初の心忘れたり

捨られし夜より雨ふるきりぐす　其成

大過初九二變日枯揚生梯老夫得其女妻

筏木の流れながらのわか葉哉

二日晴

宛丘

享和句帖

信濃路の田植過けり風巾（いかのぼり）　六二

東門之枌

夕涼み舞の一手の水にちる　宗讃

そろ〳〵とよ所は旅立田植笠

衡門

暮ぬ間に蚊屋を張るあさぢ哉

かくれ家や蠅にまける人の來る　月船

三　日晴

東門之池

里の女や麥にやつれしうしろ帶

麻漚す池小さゝよ涼しさよ

明星に一原作
明星や

東門之楊

みじか夜や蕣一つ咲そめて　魯隱

明星に櫻さだめぬ山かつら　其角

明星に影立すくむ葵哉

墓門

鴉がさきがけしたり梅の花

四　日晴

防有鵲巢

揚土に何を種とて麥一穗

月出

夕月のけば〳〵しさを秋の風

享和句帖

株林

嶋原へ行ぬふりして夕涼み

諸キヨタセイタレ

來迎

人集ケ本文タト振假名ス

五日雨

澤陂

まじ〳〵と稲葉がくれの蓮哉

曉に人氣(ケ)も見へぬ荷(はちす)哉

貢なき澤と見たり蒲はち葉

羔裘

夏山の膏ぎつたる月よ哉

素冠

身をうくて散花見ばや角田川　みち彦

あさら井の今めかぬ也夏花(ゆはな)つみ　一茶

六日晴

隰有萇楚

松間にひとりすまして梅の花

なか〳〵に山のおくこそ住よけれ

艸木は人のとがをいはねば

匪風

釜鬻を洗ふて待や野はわか菜

うつくしう鍋うつむけし川邊哉

享和句帖

蜉蝣

手にむすぶ水にやどれる月かげの
あるかなきかの世にも住哉

七日 晴 江戸ニ入 二の宮事

八日 晴 山とく

九日 雨

松風も昔のさまよ小夜ぎぬた
安元の比の櫻哉 夕の鐘

タン病藥、ミカンノ實皮葉且艸人參少加

あたら雨の晝ふりにけり花の山
砧打ば雨げづきたる榎哉

花の山ー字體明瞭ナラズ

砧打ー木文砧ヲ脱ス

砧打夜より雨ふる榎哉

十日 晴

十一日 晴

植捨の松も老けり秋の暮

銀閣寺ニアリ延德十二年正月七日足利八代義政公沒ス 諡號慈照院喜山公 此地ニ隱居し給ふ

義政公

我庵は月待山の梺にて
かたぶく庭のかげをしぞ思ふ
川下は知職の門よ夕紅葉
砂よけのきのふは見へず柿紅葉

建治元年四月廿九日中院入道大納言爲家卿沒

一茶叢書

こやし積夕山畠や散紅葉

二軒して作る葱(ネブカ)や柿紅葉

日の暮の背中淋しき紅葉哉

川と見え露と見(み)たり夜明番に

夜明番―ネズバンカ、字體明瞭ナラズ

十二日 雨

此人も別れとなりぬ年に月

年に月―字體明瞭ナラズ

五日月此世の雪も見倦てか

杖かりし夜はおとゝしよ門の雪

もてなされしも―本文れチ脱ス

涼暖舍主人は予がゆきに茶などもてなされしも

ゝ、―一言ト見ユレド字體明瞭ナラズ

はや三とせに

ゝ、主人は予がゆきに足を休められしもはやく

られしも―本文れチ脱ス

三とせにと、

候人

一つ鵜の水見てゐるや秋の暮

コヽニ無駄書アレド判讀シガタシ

十三日 晴

十四日 曇

十五日 雨

靈岸嶋川口丁木場岸石橋隱居

治承四 十二月廿八日南都兵火文治元 三月廿四日

安德帝入水 同五月廿三日重衡沒

享和句帖

奢也　尺
侈（シ）　氏反
ホコル　スツイ
ヲコル

入入（シフ）合　古財也　合

九三公用亨（デ）于天子小人弗レ克

方　方
兵　井　方（どやう）
郷　盈　喬　鑣

十六日　晴　鳲鳩

鶯や松にとまれば松の聲
椴からも二つなきけりかんこ鳥

十七日　晴

菱沼氏の老母身まかりけるに

行先も明るかるべし秋日和
下枝に子も口似や閑古鳥
刈株のうしろ（泉下）の水や秋日和

十八日　曉雨　四ツより曇

十九日　雨　稲荷祭

廿　日　雨

廿一日　雨曇　晝より晴

七　月

桑つむや負れし姉も手を出して
細腕に桑の葉しごく雨夜哉

享和句帖

一茶叢書

親方の見ぬふりされし晝寐哉　七二

煮木綿の雫に寒し菊花　支考

廿二日　晴

八月十九日出

一、書　一通　句入　大津　騏道

閑坐所思

此山は艸ばかり也三ヶの月　同

萩の戸や日暮てしばし灯の見えず

露しもや呼ば近づく小鳥共

晝寢

秋立や此一里は水清し

手のとゞく松に入日や花芒

晴てのく霧のはしゞ鴉の海

井り右

政妥十年七月十三日出

一、書一通　ナニハ雨來

鐘撞て鐘なでゝ見んけさの秋

玉祭る夜に余の夢はなかりけり　ナニハ孚舟

一、書一通

秋立て十日あまりや夜の空　升六

七月十七日出

一、書一通

六尺の臾に秋立あした哉

享和句帖

冬の日も長閑
山木は冬も長閑に

木がらしもしづ心なくくれ竹の
世にこのましき窓有明

四月十一日出

一、書一通　京其成

四國行脚

うつる日や心のまゝと更衣

右四通、菊屋太兵衛方より來る也

月の夜を降明す也春の雨　宰町

廿三日　晴

廿四日　晴　夕雨

廿五日　雨

扇波百ヶ日

うつる日やあはれ此世は秋寒き
松の木も在所めきけり秋の雨
口明て親待鳥や秋の雨
ひよろ長艸四五本に秋の雨

四五本―本文本ヲ脱ス

廿六日　晴

廿七日　雨　夕方日出る

廿八日　晴　馬橋に入

廿九日　晴　流れ山に入　夜雨

享和句帖

十　月

一日 晴

小金領篠籠田村より呼塚村に出る、流山より我ビコ迄三里

霜どけやとらまる枝は茨也

布川ニ入

二日 晴

蟋蟀

きりぐす鼠の穴にて鳴おはりぬ　失念

きりぐす―嵐雪の句「蘆にて」

七月

染總（フサ）のつゝぱりとれて菊の花

艸染の總の下迄かれの哉

九月

乙松も索を綯るや冬日向

風下の蘭に月さす蚊やり哉

蚊のゆふべ坊主にされし一木哉

夕顔や兵共の雨、祝

餅音の西に東に蚊やり哉

富士おろし又吹けくと蚊やり哉

木一本ありては蚊やりく哉

蟬鳴や袖に一粒雨落て

享和句帖

桶あてるちよろ〳〵瀧や蚊の聲

九

浮嶋やうごきながらの蟬時雨

六月の空さへ廿九日哉

帷子や我世と成て廿年

萍にいつ寄木の薄紅葉

萍や朝から闇き松片枝

おくればせに我が畠も茄子哉

子を見せに鹿もわせるや寺の山

親鹿のかくれて見せる木間哉

傘の下にしばらくかのこ哉

鹿の子の人に摺たる芝生哉

親鹿の一本文のチ脱ス

おへば追ふ鹿子の兄よ弟よ

※一

我は為の山の水性や閑古鳥

我　不足の身の員に入

借四十年已に

片隅に乳の不レ足かのこ哉

むら雨の北と東に夜川哉

心あてに柳の下を夜河哉

亂萩門の葎におとらじと

御馬の屁なかれけり萩の花

享和句帖

一茶叢書

投られし角力も交る月よ哉

我植し松も老けり秋の暮

手の前に蝶の息つく芽哉

川曲へつゝつき落す芽哉

赤兀の山の最眉や遠きぬた

妹山や砧なくともなつかしき

日中にどたりばたりと砧哉

晝行し藪の邊ぞ遠礒

姥捨の山のうらみる今宵哉

三日 晴

七月

雪守が山を下りけり梅花

鳴鶏

翌ふると鳴鶏なくか梅の月

二

戸をさして月にもそぶく住居哉

夕暮や鳥とる鳥の花に來る

三

口も手も人竝でなし小夜礒

大壯九三と云

小男鹿の角引かけし葎哉

四日 晴

東山

享和句帖

鶯の四月啼ても古郷哉

古きてそ屁はよけ行烏瓜　古きてそ—本文ノマヽ

直指庵夜更

夕されば時雨のみして片岡の
里の火かげの見えみ見えずみ
時雨つゝ日影さしつゝいとまなみ
よるべなき身の行末也けり　よるべなき身の—本文よるべなきの身のトアリの一字脱

夜終人もなぎさの柴舟に
しばゞあれてちどりなくらん

五日 晴

伐柯

斧の柄の白きを見ればとしの暮

九畿

夜すがらなきてとゞめよ蛬

秋の別はあわれにやはあらぬ

火地晋

北しくれ馬も故郷へ向て嘶く
桃苗の二葉うれしや芥子畠　うれしや—本文うれきやトアリ

六日 曇

明夷

京見えて臑をもむ也春がすみ

狼跋

享和句帖

一茶叢書

引足は水田也けり枯茨　　靜女

兵が足の跡ありけしの花　　北風

靜女ノ木文墨消シ

七日　曇

大卅日梅見て居をそしらるゝ　　北門

慧心僧都

延暦寺源信和尚和州葛下郡ノ人卜氏也家書往生要集巻　寛仁元年六月廿日遷化

小夜更て友舟もなき汐あひに

波立くらしちどり啼也

松風も又めづらなれくれ竹の　　世にこのましき窓の有明

風火家人

火種なき家を守るや梅花　　泉水

一足も踏せぬ山の櫻哉　　簡兮

梅咲くや門をならべし昔好

八日　晴

享和句帖　　旋丘

一茶叢書

京の師走高みに咲ふ佛哉

窓引によりのけられつ秋の暮　式微

子七人さはぐかれの、小家哉　水山甕

西向て小便もせぬ月よ哉　擊鼓

城きづくつくりの松に時雨哉

十日　曇　終風

起く〳〵に嘘の音やゆ神の霜　日月

日よ月よふゆるものには白髪也　雷氷解

待もせぬ木の流よる春邊哉

むら時雨ふるのとま屋の夕暮に

遠かた人の柴はこぶ也

小夜更て月ばかりなる荒磯の

波のいづこにちどりなくらん

十一日　晴

燕々

木がらしの吹行うしろ姿哉

更る月おくり度身は女也　旦藁

享和句帖

木がらしの一
風雪の句

又來たら我家忘れな行燕　　緣今

忘らるゝ身とは思はずちかひてし人の命のおしくもある哉

紫の袖にちりけり春の雪　　荷舟

長きにも卷ぬ人や古袷

大家一本文ノマヽ脱字アラン

十五日 晴

借はぐる松よ古井よ冬日向

冬日向松を持たざる家の前

大家一まき過て冬日向

晴天の一字體明瞭ナラズ

稲妻や一本文ヤチ脱ス

家一つ畠七枚冬日和

次の間に行灯とれしこたつ哉

晴天の眞晝にひとり出る哉

朝戸出や炬燵と松とつくば山

稲妻や窪きところは伊賀の山　カハチ　来紀

春の蝶一日づゝの油斷哉　遠州可月

秋風のすがり付たる木葉哉　タンコ　武陵

山澤損

三人の中の一人は時雨哉　　古人

木がらしや二の坂過る今の人

菫　常州　カケヒキ花

紫陽花　上總　越後牡丹

木兎　下總權七奉公むた奉公を云
時鳥　ナツテタカショ
財布　信州又下總の甚吉と云

十二日　晴

騶虞

大豕の臭出しけり芦の花

田川に入

芭蕉の日

影ぼうしの翁に似たり初時雨

何彼穠

梅咲や此里いまだ延喜式

完來

家三四—本文墨消シ

朝火濟て—字體明瞭ナラズ

家三四

祈はしらぬ里也桃の花

江有記

朝火濟てむら雨過て不二の山

風雷益

首上て龜も待たる初日哉

けふ一かたけたらへざりしさへかなしく思ひ侍るに古へ翁の漂泊かゝる事日〳〵なるべし

三度くふ旅もつたいな時雨雲

十三日　晴

小里

享和句帖

日榆哉ー寧體明暗ナラス日投哉トモ見ユ

一茶叢書

三つ五つ星見てたゝむふとん哉

標有梅

青梅をうつや女の塗木履　木導

七つ三つ青梅もおつる日揃哉

殷其雷

わか竹のおきんとすれば電り

澤天尺

雨三粒はらつて過し扇哉

玉霰降れとは植ぬ柏哉

茶の水の川もそこ也初しぐれ

枯野原あぢな方から夜が明る

ざぶりぐ〳〵雨ふるかれの哉

素湯釜ヲ一木文ノマヽ

片耳は尾上の鐘や小夜砧

耳際に松風の吹く夜永哉

素湯釜を二人し聞は夜永哉

霜の夜や人待貞の素湯土瓶

ばか長き夜と申したる夜永哉

日枝おろし脛吹越る榾火哉

雨の日や榾を踏へて夕なかめ

うれしさは曉方の榾火哉

掌に酒飯けぶる今朝の霜

霜がれや東海道の這入口

十四日　晴

享和句帖

やよけにも―
本文ノマヽ

鳥の巣の―本
文のチ脱ス

一茶叢書

やよけにも昔よ落葉焚女

羔羊

としよりの高股立や今朝の霜

行露

鳥の巣の抜盡されし庵哉

梅守に舌切らるゝなむら雀

甘棠

折れば手のくさる榎や夕涼み

故ありてさはらぬ木也夕涼み

天風姤

つるべにも一夜過ぎけりなく蛙

諸大夫にすれ違ふたる頭巾哉

鶴も來て耕す人に交りけりイヨ夘し

鉢たゝき汝一人があかつきかイカ蕉里

うす雲に吹合せけりけしの花チハリ臥央

短夜の枕にあてる野山哉　岳輅

啞蟬のとまり直すもおろか也エツ中白年

芦の角螢の艸も萠ぬべし京　五芳

春の風磯の月夜の外を吹カハチ八千里

冬の夜のしづかになれば梟哉カハチ歌三

大鳥の啼て過けり春の宵ナカト羅風

十五日　曇

采蘋

享和句帖

釜かけて空見る人や秋の暮　九六

蜻虫

椎柴にむせぶもうれしはつ時雨　竹阿

はつ時雨―本文雨チ脱ス
竹阿―二六庵ト號ス一茶ノ師ナリ

鎌倉の見へる山也蕨とる

采葉

菱餅や雛なき宿もなつかしき

菱餅―本文遠餅ニ誤ル

澤地萃

牡にもれし鹿かよ夕時雨
晝比にもどりてたゝむふとん哉
座ぶとんに見ておはす也松の鳥
片袖に風吹通すかれの哉
こ五遍呼巡るちとり哉

こ五遍呼巡る―こハ六ノ書損カ呼ノ字體モ叫即ナラズ

丘の馬の待あき顔や大根引

鵲巣

大根や一つ抜てはつくば山
一本は翌の夕飯大根哉
むら雨にすつくり立や大根引
我庵の冬は來りけり痩大根

十六日 暗　潔清館鴻巣光岡

鵲巣

秋寒むや行先〳〵は人の家

鱗之趾

火嫌も親ゆづり也門の雪

享和句帖

汝墳

京見えて一汗入る木陰哉

地風升

暖國の麥も見えけり山櫻

秣負ふ一芭蕉ノ句

わか茶摘一本交摘ニ成ス

十七日 雨

漢鹿

さはつてもとがむる木也夕涼み

秣負ふ人を栞の夏の哉

宋苣

茜うら帶にはさんでわか菜摘

わかなつみわかなつみ〳〵誰やおもふ

七郷の一ツ交村中のトアルヲ消シテ再案

細腕の日の大きさよ朝わか葉

兎買

七郷の柱とたのむ榎哉

親のおやの打し杭也あじろ小屋

澤水困

三とせ不レ覿つぎほは花も老にけり

膳先へのさばり出たり葛紅葉

上 雨落の石問む

象は齒あるを以て其身を焼かる

十八日 晴 布川ニ入

桃夭

享和句帖

不相應の娘もちけり桃の花

冬斯

人の世も我もよし也とぶ螽

樛木

わか葉して窠よけに見ゆる雀哉

親の世に生し蔦かよあじろ小屋

水風井

堀かけし井戸の春邊の一つ哉

卷且

大名のなでゝやりけり馬の汗

御馬の汗さまさする木陰哉

竹かごにすこしあるこそわかな哉

春曦

友梅ー文字明
瞭雨ナラズ

葛覃

今様に染ずもあらなん葛葱

此やとの里のならひと門どに

葛ふ布をかけ川の里

糊こはき帷子かぶる畫窠哉

火風鼎

夜〳〵の雪を友也菜雜水

十九日晴

震爲雷

軒だれのはやかはきけり電(いなびか)り

享和句帖

時によりふりなば民のなけき也　實朝

八大龍王雨やめ給へ

七日目にころ〳〵もどる猫子哉

廿日　曇　金谷ニ入

○行人が此爐も見なん夕時雨

○我上にふりし時雨や上總山

時雨雲かゝるにはやき木曾ぢ哉

吹かれ〳〵時雨來にけり痩男

一時に二ッ時雨し山家哉

山の家たがひ違ひに時雨哉

けぶり立隣の家を時雨哉

北時雨火をたく貞のきなくさき

きなくさき―本文くチ脱ス

一本殘す―さらすチ滑シテ一本トアラタム

時雨雲―初時雨トアルチ滑シテ再案

□くたこんや―本文ノマヽ、不明

大根―本文根チ脱ス

時雨よと一本殘す大根哉

○時雨雲毎日かゝる榎哉

切株は御貞の際やわかな摘

○淋しかれと一本殘す大根哉

法印も御ざんなれと大根哉

大根引一本づゝに雲を見る

□くたこんやてんかく也かりをつかひ

弁當

跡とりや大根かたけて先に立

身じろぎのならぬ家さへ花の春

かつしかや眞間の入江にさちあれと

柳ながめてのせぬ舟人

享和句帖

風寒み時雨くすらし小山田を

おちくる水も暮いそぐ也

おちくるー本文おおくるトアリ

紅葉丶のゆたのたゆたの河浪□

□も□□ち流わづらふ

河□□ー字カスレテ讀メズ

千鳥鳴波もあらしも音たえて

夜あくるらん月かたぶきぬ

○跡とりや大根一本負におひ

御迎ひの鐘の鳴也冬籠

○頭巾とる門はどれ〴〵花の春

人に喰れし櫻咲也みよしの山

冬籠り江戸の

ー以下ナシ句案中途ニテ見合セタルカ

冬籠り江戸の清水を江戸のはづれや冬籠

松一木つらされし畠冬こもり

○雀踏む程畠あり冬籠

○親も斯見られし山や冬籠

冬ごもる其夜の膝に竹の月

水鳥や芦の葉の船に入

水鳥のあなた任せの雨夜哉

鐘の聲水鳥の聲夜はくらき

降雨に水鳥どもの元氣哉

水鳥や人はそれ〴〵いそがしき

水鳥の壁ー本文鳥ヲ脱ス

町内の一番起の火鉢哉

暮るゝ迄日のさしにけり土火鉢

松風の吹古したる火鉢哉

享和句帖

二日程居り込んだる火鉢哉

式臺

外川風の堀の眞西吹く也大火鉢

爲山

今更にとふべき人もおもほえず

八畫葬して門させりてん

あながちに留主とも見えず梅の花

廿一日曇

鶯や南は鴻の背たゝく

雷澤婦妹

春の日や跛車の山路ゆく

闌更

やえ〳〵の妹もとつぐ春邊哉

雷火豐

半蔀におつかぶさるや桃の花

夕顔の長者になるぞ星見たら

咲は夕顔長者になれよ一つ星

廿二日曇

火山旅

焚殘る巢をくわへ行烏哉

廿三日曇 木下御成

巽爲風

享和句帖

一茶叢書

鷹それし木のつんとして月よ哉

兌爲澤　和兌吉

艸の餅暮待人の又ふゆる

廿四日 晴　霜　江戸隨齋ニ入

廿五日 晴

夕やけの鍋の上より千鳥哉

あきしわる　市

枯艸　氷　千鳥

廿六日 晴

○山川のうしろ冷し歸花

片袖は山手の風や鳴千鳥

晴ー曇ヲ消シテ改ム

夕やけの—本文のヲ脱ス

枯茨のけてくれけり先の人

冬枯の萩も長閑けく賣家哉

かれ芒人に賣れし一つ家

○かれ葱かなぐり捨もせざりけり

赤い實の毒〳〵しさよかれ芒

灯をけして松風聞んかれ芒

○かれ萩に口淋しがる二人哉

賣家の長閑也けりかれ茨

○かれ萩に裾引かける日暮哉

一人ふえ〳〵けり艸の雪

○見え透ぬ巨燵也不二見窓

○赤人見る槇をうへて巨燵哉

享和句帖

見え透ぬ—本文ノマヽ密ノ字體甚瞭ナラズ

赤い實の粒〳〵轉るたどん哉

○おのが身になれて火のない火達哉

おのが身に一本交おの身にトアリ

○木がらしの夜に入かゝる榎哉

○木がらしや隣といふは淡ぢ嶋

○木がらしや鋸屑(おがくづ)けぶる辻の家

木がらしや枕元(にまくら)なる淡ぢ嶋

南天よ巨燵やぐらよ淋しさよ

廿七日 雨

くわん〳〵と炭のおこりし夜明哉

○炭くだく腕にかゝる夜雨哉

○昔人の雨夜に似たりはかり炭

○赤い實も粒(はかり)〳〵轉(込たる)る粉炭哉

二三俵粉炭になるもはやさ哉

○起てから烏聞く也おこり炭

鳴鷄のはら〳〵時の炭火哉

都にもまゝありにけり鰒の貞

とら鰒の貞ましく(を)〳〵と葉陰哉

鰒汁くひさくもなるつふり哉

とら鰒の貞をつん出す葉かげ哉

聞く也一本交也ヲ脫ス

忽に淋しくなりぬ炭俵

けつそりとほしへり立ぬ炭俵

炭もはや俵の底ぞ三ヶの月

赤い實は何の實かそもはかりずみ

もゝしきの大宮人や鰒と汁

○葱の葉に貝をつん出す鰒哉

鰒好と窓むきあふて借家哉

鰒好に住こなされし借家哉

○親分と家向あふて鰒と汁

汝等が親分いくら鰒と汁

京にも子分ありとや鰒と汁

はら〳〵と紅葉ちりけり鰒と汁

山紅葉吹おろしけり鰒と汁

紅葉、はぇほしみてさけ鰒と汁

鰒汁や大宮人の貝をして

一人ふぇ〳〵けりはかり炭

けふ〳〵と命もへるや炭俵

廿八日 雨

藪ごしに福〳〵しさよおこり炭

炭の火のふく〳〵しさよ藪隣

どこを風が吹かとひとり鰒哉

場ふさげと思ふ間もなし炭俵

淺ましと鰒や見らん人の顔

隣からわろくいはれし松の雪

初雪や脛を吹かれし御さぶらひ

京も京京の眞中や鰒と汁

心なしと人はのたまへとかけ

聞侍ふぞ庭の松風

無心所着

○初雪のふはふはかゝる小鬢哉

○眞晝の艸にふる也たびら雪

○初雪や誰ぞ來よかしの素湯土瓶

七りんの門も旭や艸の雪

○粉こねし□の半戸や冬木立

初雪は竹にふる也痩竈

剩へ海へ向つて冬椿

千引

世にあはぬ家つんとして冬椿

心なしと—本文ノマヽ後ニコレト同一ノ歌アリのたまへと心しあれはニテ本文ノのたまへとかけハ誤リナルコト知ラルベシ

火のけなき家つんとして冬椿

○外取りの□日さすや冬椿

○日の目見ぬ冬の椿の咲にけり

○塊のはしやぎ拔けり冬椿

賣家につんと立たる冬木哉

うつろへど雨吹かゝるかけ菜哉

○かけそめし日からおとろふかけ菜哉

○御迎の鐘待軒にかけ菜哉

○二軒前干菜もかけし小家哉

御佛の眞向先がかけ菜哉

水鳥のどちへも行ず暮にけり

二軒前干菜かけたり艸の雨

火のけなき—本文に以下消シアリ

初雪や我に―以下本文ノニナシ

一茶叢書

初雪や我に
ゆで汁のけぶる垣根也みぞれふる
酒飯の掌にかゝるみぞれ哉
酒菰の戸口明りやみぞれふる

廿九日 雨

夕みぞれ竹一本もむつかしき

卅日 雨晝より晴

心なしと人はのたまへど耳しあれば
聞侍ふぞ庭の松風
掌(てのひら)に酒飯けぶる寒哉

けしからぬ月夜となりしみぞれ哉
みぞれはく小尻の先の月よ哉
鳥の羽のひさしにさはる寒哉
風寒し不二にもそぶく小窓哉
風寒し〳〵と瓦灯哉
井戸にさへ錠のかゝりし寒哉
あたら日のついと入けり歸り花
畠人の思ひの外や歸花
北窓や人あなどれば歸花

十一月

一日

享和句帖

十月四日　只尺沒　かん坐

二日　晴　土佐ニ入　長兵衛六兵衛　鐵砲丁　さがみや次郎兵衛

三日　晴　駿河臺ニ入　辰次郎　惣引

四日　晴

五日　晴

兌爲澤引兌

しぐるゝや牛に引かれて善光寺

六日　雨

風水渙

汗〳〵と顔おしぬぐふ別哉

雪どけや麓の里の山祭

七日　晴

八日　晴　フイゴ祭リ　馬橋ニ入

鹿鳴

さをしかの重り伏せるかれの哉

唐詩傳心借

我々が顔も初日や御代の松

さをしかの一句ニアル句作者士芳

九日　流山ニ入

巨燵頭巾

京人にあらねど都したはしゝ

町〳〵や土用の夜水行とゞく

享和句帖

十日 晴

川縁や巨燵の醉をさます人

に　をさますゆふべ哉

川縁ー川縁に巨燵をさますゆふべ哉ナラン

源氏物がたりに在五が物がたりか、物がたりと云は只に此文也

鳥の子を十ヅヽ十を重ぬとも

思はぬ人をおもふものかは

行水にかずかくよりもはかなきは

おもはぬ人を思ふ也けり

十一日 雨

小星

鉢たゝきまして拙者がおろかでは　乙州

ないものは何ンぞのやうに梅の花　柏原の人　楓人

不二瓢眞ともにかゝる頭巾哉

ことし頭巾ますとゆふべ哉

十二日 晴

同村　藩生高橋甚蔵

江有記

使犬吠シル「ナカレ

菜の花や行拔ゆるす山の門

十三日　花遊　野田屋喜太郎　小金町

享和句帖

壺口　龜屋小右衞門
探翠　鈴木仙吉
嘯花　布施村　ろうそく屋彦兵衞
野有
死藥
初九

出ぎらひが竹に水打月よ哉　重厚

十四日　晴

松ありて又松ありて餅の音
のし餅にや□の旭のあたる迄　角田河
餅つきに

けろ〳〵と師走月よの榎哉　何彼穢
旅の空師走も廿九日哉
旅鴉師走も廿九日哉

十四日　晴　大谷口ニ入

片壁に海手の風や冬の月　八木原五右衞門　賀
冬の月膝元に出る山家哉

騎虎

武士ばりし寺のそぶりや冬の月
三足程旅めきにけり野はわか菜
あゝさぢふは葱（ねぶか）づくめの祭哉

享和句帖

もちつきはうしろになりぬ角田川
冬の月さしかゝりけりうしろ窓
赤い實は何のみかそもかれ木立
君が世の鶏となりけり餅の臼
赤柏先神の日と申すべし
君が代を雞も諷ふや餅の臼
初雞に神代の臼と申べし
片脇に息をころして花見哉
ふは〳〵としていく日立一葉哉
青柳に任せて出たる扇哉
春の雨よ所の社もめづらしき
宵越のとふふ明りや蚊のさはぐ

屋哉―本文哉ヲ脱ス
とふふ―豆腐

雨だれは月よなりかへる雁
艸の雨松の月よやかへる雁

餅臼に　の十五日

艸の雨松の月よやかへる雁十五日
雨だれの有明月やかへる雁

☳☳☳ 風澤中孚九々

としとりに鶴も下たる畠哉

十五日 晴 布川

○野は柳に頭巾やよけん笠よけん
○看板の團子淋しき柳哉
燒餅に烏の羽や春の雨

享和句帖

青柳と慥に見たる夜明哉
名月もそなたの空ぞ毛唐人

十六日 曇雨

雷山小過

☳のとゝき☶のほとゝぎす
一聲ヅゝに雨はふりきぬ
ふりかけていく日の雲や夏木立

四杜

飛上り飛下りッゝ舞ふ鳥の
つかの間もなき世にぞありける

十七日 雨

歸る雁北陸道へかへる也
歸る雁何を咀して行やらん
小田雁一となりて春いく日
行灯で飯くふ人やかへる雁
○門口の行灯かすみてかへる雁
かへる雁驛の行灯かすむ也
行雁や更科見度望みさへ
一度見度さらしな山や歸る雁

十八日 晴

☲☲ 既濟

享和句帖

年已に暮んとす也旅の空　一二八

初雷やエゾの果迄御代の鐘　初雷やー本文ヤチ脱ス

曉のムギの先よりほとゝぎす

是からは大日本と柳哉

油火に宵雨かゝる柳哉

後より雪のふれかし小風呂敷　恒丸

鍋のすみかけば山家に初蛙　一樂

五月雨や赤い雲から降もある　同

廿日　晴　晝より雨　小金原ニ入

六ツ崎　大ミノ塚　小ミノ塚

青柳の先見ゆるぞや角田川　見ゆるぞやー本文ヤチ脱ス

爪先に夕雨かゝるかれを花　雨塘

炭竈にぬり込られし旭哉　崖鑑ニ―本文崖鑑ぬり込し旭哉トアリ

橋に立人を見よとや冬日さす　成之

片時もおくれぬふりや野萩咲

つゝがなき一年思へ椙たく夜　雨塘

爪先のぬかりみ明りかれを花　一茶

くもれども人はかはらぬ盆の月　眉尺

廿一日　晴　木更津ニ入

所かはれば鐘もうれしき　所かはれば―以下三句ハ附合也

針の穴二人で通ほす五月雨　享和句帖

旅ゆくやなの柳のかげ

一日おきに朝風呂の立

元祿四　七月十五日

秀次公　高野に御自害

民家にて

思ひきや雲井の秋の空ならで　市道

竹あむ窓の月を見んとは

はち〳〵と椿咲けり炭けぶり

常　棣

あらはるゝ色のうしとや春霞

立かくすらん山櫻花

背　命

潦（にはたづみ）ニハクナブリのいとまなみ

立と思へば又あさるみゆ

伐　木

あら玉の年の暮行くおく山に

木を伐るしづか也けり

其　二

としうへの人交りて里神樂

山櫻きのふちりけり江戸客

☲☵ 火水未濟

きつの火の夜たい〳〵にもへ出る

艸　葉〳〵も春にぞありける

天保二

君が代は千代に八千世にさゝれ石の

いはほとなりて苔のふる迄

三

月のど日の升るど松の葉の

さかへるがど大宮所

采薇

來年はくとて暮にけり　露川

日の本の人の多さよとしの暮　才丸

廿二日 雨

廿三日 晝より晴

出車

なやらふや枕の先の松の月

五

春立といふばかりでも艸木哉

杖柱

木一本畠一枚夕涼み

春雨や何に餅つく丘の家

膳先に雀なく也春の雨

廿四日 晴

北サガや春の雨夜のむかし杵

魚麗

君が代や乞食へあまるとし忘

南有喜魚

夕顔や艸の上にも一ッ咲

十五日雨扱迂擇寺所化荷　圓閑

荷ハ落トニ見ユ

彫弓

一ぱいにはれきる山や弓始

六月

二代目の漸おこす澤べ哉

汗くさき兜にかゝる月よ哉

一舍おくれし笠よ啼雲雀

采邑

二代目に田とはなれども澤邊哉

廿五日 夜 寒ニ入

今時分の寒の入らん夜念佛

降雨の中にも寒の入にけり

車攻

親ありて狼ほどくゆうべ哉

下配の猪をにる夜や親二人

廿六日 雨 富津より大乘寺ニ入

廿七日 晴 元名ニ入

廿八日 晴 北風

廿九日 晴 夜雨 金谷ニ入

西方をわすれてるりのひかり哉　薩陽不知人

汐風の吹古しけり梅の花　兒石

享和句帖

日午―日ハ巳ニ見エ午ハ午ノ誤リカ

一茶叢書

病中

ふまぬ地をふむ心也夕紅葉

吉日

山櫻日毎ふく日にちりにけり

鴻雁

万よき日牛の山やまだ寒き

鴻雁

歸る日も一番先や寡雁

庭燎

いのこの火治世の雨のかゝる也

衞士の火のまゝもゆる霰哉

旅の家―原作田舍哉ノ上ニ朱筆ニテ訂正ス

卅日 雪始テフル

汚水

山川も心あればぞわだつみの

神の都に流入る哉

初雪に聞おじしたる翁哉

海音は堺の北也夜の雪

はつ雪のかゝる梢も旅の家

十二月

一日 晴

初雪やかゝる梢も江戸へ二里

初雪や江戸見へる家におり合

享和句帖

一茶叢書

江戸迄はまだ□□□に雪の山　鶴鳴

夕時雨すつくり立や田鶴　鶴鳴の下方ニ島ノさし繪アリ省ク

御佛の外の石さへ秋の暮　祈父

雨の手に桃と櫻や艸の餅　雨の手に一芭蕉ノ句

手束弓矢島の蟹も十夜哉

蟹となり藻となり矢島守かや

二　日晴　西風

ぼんのくぼ夕日にむけて火鉢哉

雷盆の上手にかけておこり炭

艸分の貧乏家や梅花

淺ぢふは畫も寐よけよ土火鉢　白駒

客の咨かくるゝ程の花も哉

駒つなぐ門の杭にわか葉哉　黄鳥

見かぎりし古郷の山の櫻哉

艸の門も貧乏めかぬ火鉢哉

野心や庭の小すみの堇咲　梅夫

山櫻空にひつつくばかり也　同

炭の火も貧乏ざれといふべ哉

山風を踏こたへたりみそさゞい

享和句帖

峯の松しばし見よとて火鉢哉

○はだ寒き國にふみ込むゆふべ哉

○灯ちら〳〵どの貞つきも夜寒哉

○秋の夜や一木立でも松の風

風吹や穴だらけでも我蚊帳

○夕貞にひさしぶりなる月よ哉

海見えて汗入る木陰哉

夕雲雀どの松島が寐所

越の立山にて

はいかいの地獄はそこか閑古鳥（布設鳥）

我はあの嶋の木性や閑古鳥

川狩のうしろ明りの木立哉

門番がほまちなるべしけしの花

今少たしなくも哉菫草

藪入のわざと暮れしや艸の月

○咲く花の日の目を見るも何年目

吉備八十八坂

○木がらしやこの坂過る今の人

松島はどれが寐よいぞ夕雲雀

鳴ながら蛙とぶ也艸の雨

煙なくても春めきし家

春めく貝にけぶり立也

小さき家の先へ春めく

匪なくても—以下三句附會ノ句

佛　俳諧の地

享和句帖

一茶叢書　一四二

是しきの竹にもかゝる初時雨

念入て竹を見る人朝寒き

木がらしや壁の際なる馬の桶

かくれ家に日のほか〳〵とかれの哉

木がらしや門に見えたる小行灯

九日　晴　エト入　野崎村與右衛門舟ニ乘

十日　晴

十一日　晴

片枝の待遠しさよ梅花

万歳よも一ッはやせ春の雪

梅の月花の表は下水也

總數百六枚

享和句帖索引

あ

青梅を……（木導）……九二
青梅に……二〇
青柳と……二六
青柳に……二四
青柳の……二八
青山を……五
赤い實は何のみかそもかれ……二四
赤い實は何の實かそもはかり……二一
赤い實の粒〳〵……一〇
赤い實の毒……一〇九
赤い實も粒……一一
赤柏先神の……二四
曉に人氣も……六四
曉のムギの……二八
赤兀の山の……八〇
赤人見る槇……一〇九
あかなくに……（歌）……九
茜うら……九八
秋風二夜……三五
秋風の……（武陵）……八九
秋寒むや……九七
秋雨や……四四
秋立て……七三
秋立や此……七二
秋の風……五〇
秋の暮……六七
秋の雨……四四
秋の夜の獨身……四一
秋の夜や……一四〇
雨灰汁に……四
揚土に……六三
明ぼのゝ……六一

朝雨の……七
麻一本……五八
あさ陰に……六
朝貝に老つら……二七
朝貝の大所の……二八
朝貝のこく……四九
朝顔や大吹降も……二七
朝貝や女車の……四五
朝貝やけさも……二六
朝顔やしたかぬれ……二七
朝貝や花見る……二七
麻藝て……四九
朝寒に……二四
朝地震と……九
あさぢふは葱（ねぶか）……一二三
淺ぢふは書も……一二九
朝露の袖から……二四
朝戸出や……八九
麻漚す……六二
朝火濟て……九一
淺ましと……一二三
あさら井の……六五
蘆の角蚕……（五芳）……九五
あじろ木に……四〇
翌ふると……八一
翌の分に……四七
汗〳〵と……一八
汗くさき……二三四
あたら雨の……六六
あたら日の……一一七
跡とりや大根一本……一〇四
跡とりや大根かたけて……一〇三
あながちに……一〇六
あひがたき……（歌）……四九
扇から……一七
扇迄……一七
油火に……一二八
雨だれの……一二五
雨だれは……一二五
剩（あまつさへ）海へ……一一四
天川都……二八
雨の萩……四五
雨の日や……九三
雨三粒……九二
飴ン棒……五
あらかんと……二七
あら玉の……（歌）……一三一
改て又……一一
あらはるゝ……（歌）……一三〇
あれ程の……一三
安元の……六六
行灯を……二一
行灯て……二七

いゐ

家ありて……一八
家一つ蔦……一八、五八
家一つ畠……八九
筏木の……六一
活鯵や……二三
活過し脛をたゝくや……二九
活過し脛を打けば……二七
活過し門の……六〇
いくばくの……一四
牲（いけにへ）に……九六
一度見度……一二七
一日おきに……（附句）……一三〇
一日にはや……一三
一二本……一一
五日月此世……六八
一尺の……二七
行て來て朝貝……二四

一ばいに……一三四
一本の……三三
一本は……九七
井戸にさへ鎹……一一七
稲妻や窪……（未耜）……八九
いのこの火……一三六
祈はしらぬ……九一
今更にとふべき……（歌）……一〇六
今時分の……一三五
今少たしなく……一四一
今時の……五六
今様に染ずも……一〇一
妹山や……八〇

う

植捨の松も……六七
萍にいつ……七八
萍（うきくさ）の……四
萍や朝から……七八
萍やいつやどり……六
萍や黒い……六
浮島に……六
浮嶋や……七八
鶯の四月……八二
鶯のもどる……（北鳳）……一九
鶯の屋根から下る……（巣兆）……一九
鶯や南は……一〇六
鶯や松に……七〇
後より雪の……（恒丸）……一二八
うす雲に……（臥失）……九五
打水や挑灯……二五
打水や這つくばひし……二六
うつくしう鍋……六五
うつくしき團……二八、三三
うつとしや雨は……一四
うつる日やあはれ……七五

四

うつる日や心の……七四
うつろへど雨……一二五
噂すれば……二〇
馬の子の……四四
海音は……三七
海の月……一七
海見えて……一四〇
梅かゝや……三七
梅咲や此里……（完來）……九〇
梅咲くや門ゟ……八五
梅さけど……五七
梅椿……四五
梅の月……一四二
梅の葉の……（成美）……六
梅一枝……四三
梅守に……九四
うら店や……七
うれしさは曉……九三
賣家につんと……一二五
賣家の長閑……一〇九

え ゑ

衛士の火の……一三六
穢太町に……七
江戸迄は……一三八
江戸ものに……（荒木）……二四
ゑりはりと……一四

お を

往來の……一〇
丘の馬の……九七
丘の梅……三六
起〳〵に片ひざ……二七
起〳〵に嘘……八六
起てから……一二
おくればせに……七八

桶あてる……七八
啞蟬の……（白年）…九五
小田雁一と……一二七
落葉して……五七
乙松も……七七
同じ年の貝の……二九
おのが身に……一一〇
斧の柄の……八三
姥捨の山の……八〇
追れ〳〵……六
おへば追ふ……七九
大家一まき……八八
大空も……（若翁）…五二
大鳥の啼て……（羅風）…九五
大花火角田河原……三二
大冢の貝……九〇
大虵の……八
大卅日梅見て……八四
御馬の汗……一〇〇
御馬の屁……七九
御迎ひの鐘の……一〇四
御迎の鐘待……一一五
思ひきや雲井……（歌、甫道）…一三〇
親ありて……一三五
親方の見ぬ……七二
親鹿のかくれて……七八
親のおやの……九九
親の世に生し……一〇〇
親分と家……一一二
親も斯見られし……一〇五
折れば手の……九四
おれぬ木の……五七

か

かい曲り……一三
蚊を殺す帋燭……二二
案山子にもうしろ……四六
かくれ家に日の……一四二
かくれ家や蠅に……（月船）…六二
かけそめし日から……二一五
影ぼうしの……九〇
陽炎の……四
風寒し〳〵……一一七
風寒し不二……一一七
風寒み時雨……（歌）…一〇四
風下の闌に……七七
風吹や穴……一四〇
風も吹月も……二一
片枝の……一四二
片壁に海手……一三三
片貝の……二九
片隅に乳の……七九
片袖に風吹……九六
片袖の風……四四
片袖は山手の……一〇八
片時もおくれぬ……（成之）…一二九
帷子や……七八
片耳は尾上……九三
片脇に息を……一二四
かぢのかとは……二一
かつしかに……五六
かつしかや眞間……（歌）…一〇三
門〳〵も雨は……二一
門口の行灯……一二七
蟹となり……一三八
鐘撞て……七三
鐘の聲……一〇五
蚊のゆふべ……七七
川音や……六六
川狩のうしろ……一四〇
かはがりの煙……二九
川曲へつゝつき……八〇

川下は知職……六七
川と見え……六八
川四の……四〇
川緣ははや……一八
川緣や巨燵……一二〇
蚊一ッの一日……一六
かへる雁驛の……一二七
歸る雁北陸……一二七
歸る雁何を……一二七
歸る日も一番……一三六
釜かけて空……九六
釜鬻た……六五
鎌倉の見へる……九六
看板の團子……一二五
灌佛や……（無衰）……六
傘の下に……七八
烏さへ……五七
鴉めが……三一
売俵……五一
刈株のうしろ……七一
狩小屋の……四九
かりそめの婆入……四八
借はぐる……八八
枯茨のけて……一〇九
かれ芒人に……一〇九
かれ萩に口淋し……一〇九
かれ萩に裾引……一〇九
かれ葱かなぐり……一〇九
枯野原あぢな……九二

さ

木一本ありて……七七
木一本畠……一三三
開初て……一一
北サがや春の……一三三
北しぐれ……八三

北時雨火を……一〇二
北窓や人……一一七
きつの火の……（歌）……一三一
砧打夜より……六七
砧打ば雨げ……六六
き　ふ入し……四九
氣の儘に……（萊國）……一〇
君が世を雞も……一二四
君が世の鶏と……一二四
君が代は千代に……（歌）……一三一
君か代や乞食……一三三
客の香……一三九
行〳〵し尋ぬる……五九
京にも子分……一一三
京の師走……八六
京人にあられど……一一九
京見えて一汗……九八
京見えて鵬を……八三
清水を江戸の……一〇四
京も京京の……一一三
切株は……一〇三
きり〴〵す鼠の……（失念）……七六

く

喰捨の瓜……三九
艸染の總の……七七
艸の雨松の月……一三五
艸の門も……一三九
艸の蚤……四
艸の餅暮待……一〇八
艸花を……三三
艸分の貧乏……一三九
口明て親待……七五
口も手も……八一
首上て龜……九一
雲形に……二八

雲の峰いさゝか……一八
雲の峯の……八
暮るゝ迄日の……一〇五
來る〳〵も……三三
暮ぬ間に蚊屋を……六二
暮れぬ間に飯も……一八
桑つむや……七一
くわん〳〵と炭……一一〇
くもれども人は……（眉尺）…一二九

け

けしからぬ……一一七
けつくして……四
げつそりと……一一一
けふきりの……四二
けふ〳〵と命……一一三
脇息に……（其角）…六一
けふも〳〵……五
けふも死に……五一
けぶり立……一〇二
煙なくても……（附句）…一四一
けろ〳〵と師走……一三三

こ

洪水を……四九
洪水は……三八
子を見せに……七八
木がらしの吹行……八七
木がらしの夜に……一一〇
木がらしや鋸屑……一一〇
木がらしや壁の……一四一
木がらしやこの坂……一四一
木がらしや隣と……一一〇
木がらしや二の坂……八九
木がらしや枕元……一一〇
木がらしや門に……一四二
木がらしもしづ心……（歌）…七四
こ五遍……九六
心あてに柳の……七九
心なしと人はのたまへとかけ……（歌）…一一四
心なしと人はのたまへど耳……（歌）…一一六
乞食せば都の……一三
木末から……八
ことし頭巾……一三一
小鳥にアナドラレ……五六
粉これし……一一四
此碑では……（其角）…七
此人も別れ……六八
此やとの里の……（歌）…一〇一
此山は……（支考）…七二
戀死ば……（遊女）…五八
子七人……八六
是からは……一三八
是しきの竹……一四二
殺されにことしも……一八
殺されに南へ……一三三
駒つなぐ……一三九
こやし積……六八
更衣申合……（茶裡）…六
三のとゝき……（歌）…一三六

さ

西方を……（不知人）…一三五
さをしかの重り……一一九
小男鹿の角……八一
さかさまにきしや……（歌）…四八
咲く花の……一四一
咲は夕顔……一〇七
咲く日より……四
探る梅朶の……二一
酒菰の……一一六
酒飯の……一一六

さし汐や……四一
里の女や……六二
さはつても……八八
淋しかれと……一〇三
座ぶとんに……九六
ざぶり〳〵……九二
五月雨や赤い……（一樂）二八
五月雨の竹に……一三
五月雨や二階……一三
三四本……四一
山椒をつかみ……五二
三度くふ旅……一一
三人の中の……（古人）八九
素湯釜を……九三
小夜更て月ばかり……（歌）八七
小夜更て友……（歌）八四
さらしなか放れし……四七
さらしなはきのふ……四七

更しなの蕎麥……三七
更しなや闇き……三七

し

椎柴に……（竹阿）九六
十五夜や……四六
汐風の……（兒石）一三四
鹿の子の……七八
しぐるゝや……一八
時雨雲かゝるに……一〇二
時雨雲毎日……一〇三
時雨つゝ……（歌）八二
時雨よと……一〇三
下枝に子も……七一
信濃路の……六二
死跡の松をも……五二
死しなの縄目……五〇
しの竹の……一〇
しばらくは枕……一八
嶋原へ行ぬ……六四
霜がれや東海道……九三
霜どけや……七六
霜の夜や人待……九三
十軒は皆……一三
正面は……四二
諸大夫に……九四
常體の……五〇
白露の……二七
白露も……（後拾遺歌）六〇
汁なべも……二九
白石の……五二
城きづく……八六

す

空腹に……六七
涼しさは……七

雀踏む……一〇五
下駄の……一三
簾して涼しや……（荷兮）三二
捨られし夜より……六一
砂よけの……六七
炭くだく腕に……一一〇
炭竈にぬり込……一二九
炭の火の……一一三
炭の火も貧乏……一三九
炭もはや……一一一
雷盆の……一三八

せ

晴天の……八九
關の灯の……三九
せゝなきの……五
蟬鳴や……七七
膳先に雀……一三三

膳先へ……九九
善人の葬……（麥士）四二

そ

外取りの……一一五
外堀の……一〇六
染総（フサ）の……七七
空留主も……四七
夫なしに……三四
そろ〳〵と……六二

た

大根の二葉うれし……三五
大根の二葉にしれや……三五
大根引……一〇三
大根や一つ……九七
大名の笠……三四
大名の……一〇〇
爐それし……一〇八
竹植て竹……四一
竹うゑて又……（士朗）一九
竹かごに……一〇〇
竹の子に……（阿彦）一九
貝一つ……五一
立枯の……（古人）六〇
忽に……一一
手束弓……一三八
七夕の……三一
七夕や親あり……三一
七夕や流の……三〇
七夕や大和は……二九
田の鳫の……四四
たのみなき……五七
旅鴉……一三三
旅の空……一三三
旅めくや……一三九

玉霰……九二
たま〳〵に……二〇
玉祭る……七三
暖國の……九八

ち

小さき家の……（附句）一四一
近道は……五〇
近よれば……四五
千鳥鳴……（歌）一〇四
茶の水の……九二
町内の……一〇五
長松が……五八
散迄に……一四

つ

杖かりし……六八
月影の……二七
月のど日の……一三三
月の夜を……（宰町）七四
次の間に行灯……八九
頭巾とる……一〇四
蔦紅葉も……五八
塊の……一一五
つゝがなき……（雨塘）一二九
兵が足の……八四
爪先に夕雨……一二九
爪先のぬかりみ……（一茶）一二九
妻に棹……三七
露けさや石……二六
露けしや艸……二九
露しもや丘の……四二
露しもや呼ば……七二
つるべにも……九四
鶴も來て……（卯七）九五

手をかけて……四二
出ぎらひが……（重厚）…二三
てつぺんの……二一
手にむすぶ……（歌）…六六
手のとゞく……七三
掌に酒飯けぶる今朝……九三
掌に酒飯けぶる寒……二六
手の前に……八〇
手招きは……五六

と

灯籠や……二九
戸をさして……八一
時によりふりなば……（歌、實朝）…一〇三
どこを風が……二一三
所かはれば……（附句）…二九
としのうへの……一三一
年已に……二八
としとりに鶴……二五
とりよりの追從……五九
としよりの高股……九四
どちからの……四〇
隣からわろく……一一三
飛上り飛下り……（歌）…二六
とら鰒の貞をつん出す……二一
とら鰒の貞ましゞく……二一
鳥をとる鳥……二八、三三
鳥どもゝ御祓……二六
鳥の子を十ヅゝ……（歌）…二〇
鳥の巣の……九四
鳥の羽の……二七

な

ないものは……（楓人）…二一
苗賣の……八
なか〳〵に……（歌）…六五
長きにも……八八
永き日の……（玉之）…一九
流れ木の……四一
長降りの……一四
鳴ながら……一四一
鳴鶏の……二一
投られし角力……八〇
投られし土俵……四四
夏艸や……（其角）…六
夏の雨……（吳山）…一九
夏の月と申……二〇
夏の月申洲……二三
夏の月二階……二三
夏山の……六四
夏山や……一七
七つ三つ……九三
七日目に……一〇三
菜の花や……二二
鍋のすみ……（一樂）…二八
汝等が……二二
南天よ……二〇
なりどしの……二〇
糞平も……四
鳴子繩……（樗堂）…八一
なやらふや……二三

に

二階から……二三
二軒して作る……六八
二軒前干菜かけたり……二五
二軒前干菜もかけし……二五
二三俵粉炭……二二
西向て……八六
二代目に田と……二四
二代目の漸……二四
日〳〵に……二六

日中に……八〇
濠ニハク（にはたづみ）……（歌）…一三〇
二番のく……四三
煮木綿の……（支考）…七二

ね

葱の葉に……一二
寐心や膝……二三
寐聳て……三〇
鼠ない里と……五一
念入て竹を……一四一

の

野あらしの……四四
軒だれのはや……一〇一
野心や……（梅夫）…一三九
のし餅に……一三
糊こはき……一〇一
野は柳に……一三五

は

はいかいの……一四〇
蠅一つ……一七
ばか長き……九三
掃初て……一八
白蓮に……七
萩ちりぬ祭……二八
萩の戸や……七二
萩もちり……三三
半部に……一〇七
橋に立……（雨塘）…一二九
馬上から默禮……四八
蓮の香を……五
はだ寒き……一四〇
畠人の……一一七
鉢たゝき汝……（蕉里）…九五
鉢たゝきまして……（乙州）…一二
はち〳〵と……一三〇
初雞に……一二四
初雪に聞……一三七
はつ雪のかゝる……一三七
初雪のふは〳〵……一二四
初雪は竹に……一二四
初雪や江戸……一三七
初雪やかゝる……一三七
初雪や誰ぞ……一二四
初雪や脛を……一二三
初雪や我に……一二六
初雷や……一二八
場ふさげと……一二三
花木槿……（闌更）…一五七
花の雲……五九
蛤の鳥に……三七
腹の中に……（歌）…五九
はら〳〵と……一二
針の穴……一二九
春雨の……（双烏）…一九
春雨や……一三三
春立と……一三三
春の雨……一二四
春の風磯……（八千里）…九五
春の風艸……五一
春の日や……（闌更）…一〇六
春の蝶……（可月）…八九
春めく貝に（かつ）……（附句）…一四一
春めくや……三六
晴てのく……七三

ひ

灯をけして……一〇九
日枝おろし……九三
火嫌も親……九七

膝節に……四四
菱餅や……九六
引足は……八四
火種なき……八五
七郷の柱……九九
灯ちら〳〵……一四〇
七りんの……一二四
一足も……八五
人員も……四八
人去て……二七
一時に……一〇二
一つ鵜の水見て……六九
一つ蚊屋の……二四
一つなくは……五六
人の世も……一〇
一群は……四四
一舎おくれし……一三四
一人づゝ……三五
一人ふえ〳〵けり蚺の……一〇九
一人ふえ〳〵けりはかり……二二
一人前菜も……六〇
人に喰れし……一〇四
日の暮の……六八
日の暮や……三五
火のけなき……二一五
日の目見ぬ……二一五
日の木の……（才丸）一三二
日よ月よ……八七
畫比に……九六
畫中の……三七
畫行し……八〇
ひょろ長蚺……七五
ひょろ〳〵と……（士朗）七

ふ

深さうな……二〇
吹かれ〳〵……一二
鰒汁くひさくも……二一
鰒汁や大宮人……二二
鰒好と……二二
鰒好に……二二
更る月……（且藁）八七
鶏が……六三
梟は春を……（春唄）一九
不二颪眞……二二
富士おろし又……七七
武士ばかり……二三
不相應の……一〇〇
二葉三葉……四六
二日ぶり……五
二日程居り……一〇六
ふは〳〵と……二四
ふまぬ地を……二六
冬枯の……一〇九
冬籠り江戸の……一〇四
冬籠初の……（其成）六一
冬ごもる其夜……一〇五
冬の月さしかゝり……二四
冬の月膝元……二三
冬の夜の……（歌三）九五
冬日向……八八
降雨に……一〇五
降雨の……二五
ふりかけて……二六
古きてそ……八二
古郷に……四二

へ

平安は……四四
べそ〳〵と……三二

ほ

法印も……一〇三
ほうきりを……三七
星に手向し……三一
星迎……二九
細腕に桑の……七一
細腕の日の……九九
時鳥聞ての……一一
時鳥逃る……一六
時鳥はおろか……一一
ほつ〳〵と……一八
盆灯籠三ツ……二九
ぼんのくぼ……一三八
堀かけし……一〇〇

ま

前住し……四六
秣負ふ……九八
まじ〳〵と……六四
又來たと……（支考）……五八
又來たら……八八
又けふも……五九
町くだり……三七
町〳〵や……一一九
待もせぬ鳥……二八
待もせぬ木の……八七
松ありて……一三一
松間にひとり……六五
松陰に……四三
松風も又……（歌）……八五
松風も昔の……六六
松風の……一〇五
松島は……一四一
松茸に……四五
松苗や……五一

松の木も……七五
松の蔦……五八
松一木……一〇五
眞晝の艸に……一一四
松迄は日もと……一一四
窓引に……八六
万歳よ……一四一

み

三足程旅めき……一三三
見え透ぬ巨燵……一〇九
身をうくて……（みち彦）……六五
見かぎりし古郷……一三九
短夜の枕……（岳輅）……九五
みじか夜や葬……（魯隱）……六三
身じろぎの……一〇三
みぞれはく小尻……一一七
亂れ萩門の……四五、七九
道よけて……五〇
三つ五つ星……九二
貢なき澤と……六四
水鳥のあなた……一〇五
水鳥のどちへも……一一五
水鳥や蘆の……一〇五
水鳥や人は……一〇五
三とせ不レ覩……九九
水上も秋に……四二
峯の松しばし……一四〇
御佛の外の……一三八
御佛の眞向（まむかふ）……一一五
耳際に……九三
明星に櫻……（其角）……六三
明星に影……六三
鄙にも……一一
見る俵……五一
見る程の……四三

む

昔人の……一一〇
昔〳〵……三三
麥刈の不二……九
麥刈の川捨も……九
麥ぬかの……一〇
麥の穗や私方は……九
むざんやな……（翁）六〇
虫除の札の……二六
紫の袖に……八八
むら雨に……九七
むら雨のかゝれ……二一
むら雨の北と……七九
むら時雨ふるの……（歌）八七

め

名月は翌と成けり……四四
名月もそなた……一二六

も

焚殘る……一〇七
木母寺が……五
餅臼に……一二五
餅音の……七七
餅つきに……一二
もちつきは……二四
も一日……七
根から（きみ）も……七〇
紅葉〻のゆたの……（歌）一〇四
紅葉〻はえぼし……一二
門番が……一四一
もゝしきの大宮……一二
桃苗の……八二

や

やえ〳〵の……一〇七
燒餅に……一二五
やけ石の……一四
やよけにも……九四
痩蚤の……四
痩驢を……二七
痩はぎに……二八
痩萩や……四一
痩松も……八
藪入の……一四一
藪ごしに……一二
山おろし……五
山風を……一三九
山川のうしろ……一〇八
山川も心……（歌）一三七
山櫻きのふ……一三一
山櫻空に……（梅夫）一三九
山櫻日毎……一三六
山水の……九
山紅葉……一二
山の家……一〇二
山松に……一四
（や）漸寒き……二八

ゆ

故ありて……九四
夕顏の具者に……一〇七
夕顏や艸の……一三四
夕顏や兵共の……七七
夕顏や柳は……二一
夕貝にひさし……一四〇
夕陰や……四
夕暮を待人……二〇
夕暮は鶏が……二八、三一
夕暮や鳥とる……八一
夕暮やひざを……二七

夕櫻……五六
夕されば……（歌）…八二
夕時雨馬も……四二
夕時雨すつくり……一三八
夕涼み……（宗讃）…六三
夕立や……（夜來）…三三
夕月の……三五、六三
夕雲雀……一四〇
夕みぞれ……一一六
夕やけの……一〇八
雪解て嬉し……五六
雪どけや……一一八
行過て……四二
雪の人……（曉臺）…五七
雪守が……八〇
行雁や……一二七
行先も……七一
行人が……一〇二
行水に……（歌）…一二〇
ゆで汁の……一一六

よ

宵越の……一三四
よき袷はしか……一六
夜時雨の……四七
夜涼みの……三七
夜〳〵の雪を……一〇一
世にあはぬ……一一四
娶貰ふ……五六
夜すがらなきて……（歌）…八二
夜終人も……（歌）…八二
よりかゝる……四〇
万よき……一三六

ら

來年は……（露川）…一三二

洛陽の……七

り

雨の手に……一三八

ろ

六月の空さへ……七八
六尺の臭に……七二

わ

我庵は……（歌、義政公）…六七
我庵の……九七
我植し……四五、八〇
我上に……一〇二
わか竹の……九二
わか菜摘袂の……四八
わかなつみわかな……九八
わか葉して……一〇〇
我星は……二九
忘らるゝ……（歌）…八八
わらすぐる……四〇
破なべも……二九
我はあの嶋の……五六、一四〇
我はあの山の……七九
我見ても……一四
我々が……一一九

索引終

大正十五年六月五日印刷
大正十五年六月八日發行

享和句帖奥附

定價壹圓六拾錢

編者　信濃教育會

長野市縣町丙十五
右代表者　佐藤寅太郎

東京市外西大久保四五九
發行者　橋本福松

東京市本郷區眞砂町三六
印刷者　左手薫

日東印刷株式會社印行

版權所有

發兌元　東京市外西大久保四百五十九番地　古今書院
振替東京三五三四〇番

548
59

15年9月9日